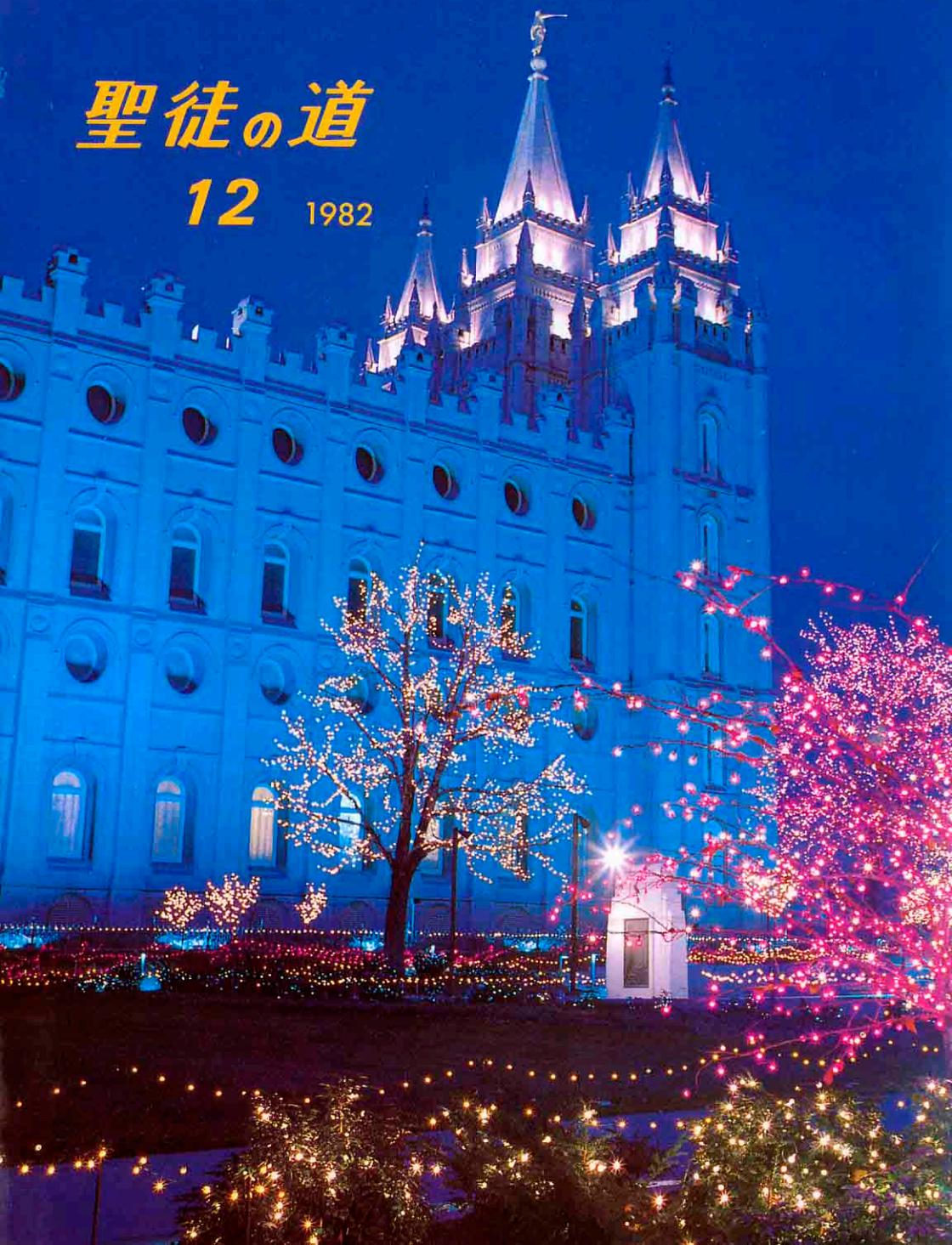


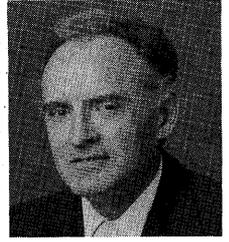
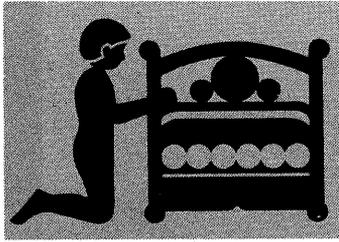
聖徒の道

1982年12月20日発行（毎月1回20日発行）第26巻第12号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

聖徒の道

12 1982





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ビーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・バックナー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ベリリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト
ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
ローレン・C・ダン
レックス・D・ピネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー
F・エンツィオ・ブッシェ

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：

ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：

デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：

ボニー・ソーンダース

デザイナー：

ロジャー・ギリング

制作：

ノーマン・ブライス

もくじ

クリスマスに捧げる祈り……………	大管長会……………	1
断食の律法……………	マリオン・G・ロムニー……………	2
什分の一とオーバーコート……………	キャロル・リッチ・ブラウン……………	5
折れた針……………	ブレント・A・バーロー……………	8
クリスマスカード……………	ドーン・ウォーカー・ネイラー……………	12
四福音書の中の福音……………	ロバート・G・パッチ……………	14
質疑応答……………	モンティ・S・ナイマン, リチャード・ロイド・アンダーソン……………	21
ソロモンの廊から……………	T・エンドガー・ライオン……………	24
約束と成就……………	リア・シスコーネン……………	34
「あなたが立ち直ったときには」……………	ジャネット・ブリガム……………	38
召しを受ける前に……………	デビッド・R・マイケル……………	41
主はすぐそばにおられ、いつでも助けて下さる……………	テディー・E・ブルーアートン……………	49
ポップ・ガンサー……………	ポール・D・キャンション……………	52
エイラのろうそく……………	マジョリー・アール・シェファー……………	54
大いなるよろこびのおとずれ……………		58
すくいぬしのたんじょう……………		61
スベンサー・W・キンボール……………		62
ローカルページ／索引……………		66

1982年12月号 聖徒の道 第26巻第12号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

制作・配送 東京ディストリビューション・センター

東京都世田谷区上用賀4-9-19

電話 03-427-4311

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

1部180円, 大会号350円

International Magazine PBMA 0529JA Printed in Tokyo, Japan.

© 1982 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

定期購読は、「聖徒の道用予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会・東京ディストリビューション・センター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注:お届け先の変更がありましたら、早急にTDCにご連絡下さい。



クリスマスに捧げる祈り

世界中の人々と共に、人類の救い主イエス・キリストの驚嘆すべき誕生を祝う喜びの季節が訪れました。今は亡き何百万という人々、そして今なお地上に生き長らえている何百万という人々の厳かな証に加えて、大管長会は再び次のことを宣言致します。すなわち、ベツレヘムでマリヤの下にお生まれになったイエス・キリストこそ、生ける神の愛子、贖い主、永遠の審判者、この世の光であり生命の御方です。

救い主の歩まれた贖いの生涯は、絶えず平和への道を照らし、この世の罪からの清めを万人にもたらしめました。神の子羊は贖いの犠牲によって死に打ち勝ち、人類の前に永遠の生命への道を備えられたのです。

救い主の生涯には、私たちが一生の間行なう瞑想や賛美や献身の、人生に対する神聖な模範を見ることができます。例えば、主はたった一言でいちじくを枯らせる力を持っておられたにもかかわらず、敵のために祈る方をお取りになりました。また、人知を超えた耐え難い試しを過酷なまでにその身に引き受けながら、なお主は愚弄し嘲笑する群衆のために、十字架の上から叫んで言われました。「父よ、かれらをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカ23:34)

それが個人の間における不和であれ、国家間の問題であれ、争いの解決を求めるす

べての人々に、平和の君の勧告をお勧めします。「あなたがたの敵を愛し、のろう者を祝福し、憎む者に善をなし、さげすむ者、迫害する者のために祈れ。こうして天にいますあなたがたの父の子となるためである。」

(欽定訳マタイ5:44—45)

イエス・キリストが私たちを愛されたように、互いに愛し合うというこの原則は、個人、家族、そしてひいては国家、世界に至るまで安らぎと平和をもたらすことでしよう。

私たちの心が最愛の者たちに向けられるこの季節に臨んで、貧しい人々、家族や愛する者を失った人々、そして肉体的、情緒的、靈的に打ち沈んで、取り乱した人々に対しても心を向けようではありませんか。温かな手を差し伸べて他の人々を高め、癒した救い主の模範に心を留めるよう、すべての人々に勧告致します。

すべての者が、主イエス・キリストを信ずる信仰を行使するよう促され、その教えに耳を傾け、戒めに従えるよう、これが全世界のあらゆる人々のために私たちが捧げるクリスマスの祈りです。

大管長会

スペンサー・W・キンボール

N・エルドン・タナー

マリオン・G・ロムニー

ゴードン・B・ヒンクレー

断食の律法

第二副管長

マリオン・G・ロムニー

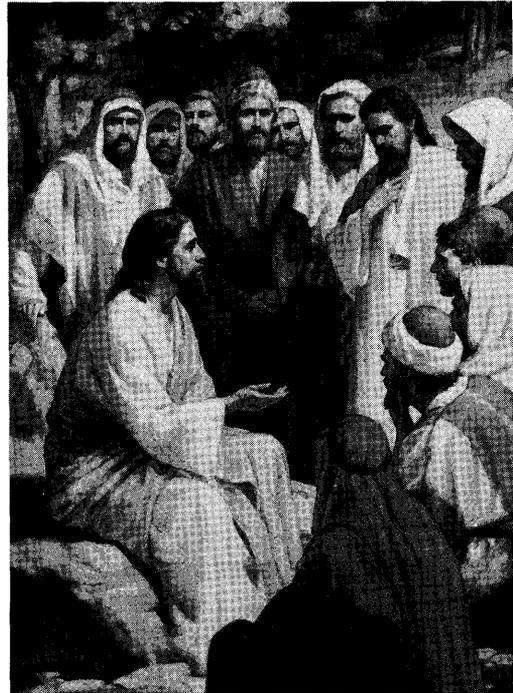
主が私たちに行なうよう命じておられる重要な戒めのひとつは、惜しまずに断食献金を納めるということです。そのようにすることによって霊的な事柄においても世俗的な事柄においても大きな報いのあることを皆さんに知っていただきたいと思います。祈りの効力は、貧しい人々に対する私たちの寛容さにかかっていると主は言われました。(アルマ34：28参照)

いにしへのイザヤの時代に戻って見てみましょう。人々は不平をもらして次のように言いました。「われわれが断食したのに、なぜ、ごらんにならないのか。われわれがおのれを苦しめたのに、なぜ、ごぞんじないのか。」(イザヤ58：3)主はこの疑問に答えて言われました。「このようなものは、わたしの選ぶ断食であろうか。人がおのれを苦しめる日であろうか。そのこうべを葦のように伏せ、荒布と灰とをその下に敷くことであろうか。あなたは、これを断食となえ、主に受け入れられる日と、となえるであろうか。」(イザヤ58：5)

現代の私たちの状況となんと似通っていることでしょう。断食となるといつも頭痛がしたり、お腹がすいて死にそうだと言うような様子を見せたりします。主は当時の

イスラエルの人々に問うて次のように言われました。

「わたしが選ぶところの断食は、……飢えた者に、あなたのパンを分け与え、さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、裸の者を見て、これに着せ〔る〕……などの事



ではないか。」

「[あなたがこれらのことを行なうならば]」と主は言葉を継いで言われました。

「あなたの光が暁のようにあらわれ出て、あなたは、すみやかにいやされ、あなたの義はあなたの前に行き、主の栄光はあなたのしんがりとなる。

また、あなたが呼ぶとき、主は答えられ、あなたが叫ぶとき、『わたしはここにおる』と言われる。……

飢えた者にあなたのパンを施し、苦しむ者の願いを満ち足らせるならば、あなたの光は暗きに輝き、あなたのやみは真昼のようになる。」(イザヤ58：6—10)

ここに引用された、他に比べるもののない祝福について考えてみて下さい。これらの祝福はすべて、貧しい人々を助けるために惜しみなく捧げ物を差し出す人々に約束されたものです。

「主は常にあなたを導き、良き物をもってあなたの願いを満ち足らせ、あなたの骨を強くされる。あなたは潤った園のように、水の絶えない泉のようになる。」(イザヤ58：11)

だいぶ前、それも実は60年ほど昔のことですが、当時十二使徒のメルビン・J・バラード長老が私の頭の上に手を置いて、伝道に出る任命をして下さいました。バラード長老は、その時私に与えて下さった祝福の中で、人はひとかけらのパンを主に捧げれば、主はいつもその返礼として、ひとかたまりのパンをお与えになると教えてくれました。以来、私はそのことを何度も経験してきました。

ヒーバー・J・グラント大管長は、断食の本質と目的および断食献金の目的について次のように語りました。

「今日この場で、私は皆さんにお約束したいと思います。もし末日聖徒がひとつの民として今日この日から正直にそして誠実に毎月の断食日を守り、……加えて、やはり正直に什分の一を納めるならば、聖徒への援助にかかわるあらゆる問題は解決されるでしょう。……末日聖徒の中で月に1度、2回の食事を断つあらゆる人々は、靈的に祝福を受けてイエス・キリストの福音に対する信仰を増すことができるでしょう——しかも素晴らしい方法で祝福を受けるでしょう。監督の下にはすべての貧しい人々を援助するに十分な手段が備えられるでしょう。」(Gospel Standards「福音の標準」G・ホーマー・グラム編、p. 123)

私たちが貧しい人々を助けるために行なうあらゆることは、靈的な面での達成度によって測らなければなりません。与える側の人々は義しい心から進んで与え、受ける側の人々は感謝と喜びの気持ちをもって受けなければなりません。聖霊は、これらの援助に対する監督の評価を確認して下さるに違いありません。私たちが義しい意図をもってこの偉大な業に加わる時、霊は清められ、精神はさらに啓発されることでしょう。また、それがどのようなものであれ責任を果たして靈的な成長を遂げる時、私たちは「神の性質にあずかる者となる」(IIペテロ1：4) 備えをしているのです。願わくは、私たちがモロナイの語った愛の絆で互いに結ばれ合うために、豊かなみたまに満たされた幸福な生活を送れるよう祈るものです。その愛とはすなわち、「キリストの純粋な愛であって永遠につづくものである。従って終りの日にこのような愛を持っている人はさいわいである。

それであるから、私の愛する兄弟らよ、

あなたたちは、神が御子イエス・キリストに真に従う者たちに一人のこらず与えたもうたこの愛で自分たちの胸を満すためにありたけの心をつくして御父に祈れ。これはまた、あなたたちが神の子らとなるためである。神の現われたもう時には神をそのありのままの姿で見るにちがいないから、その時には神に似た者になることができるためであり、また私たちも神のように清められると言う望みを持たんがためである。」(モロナイ 7 : 47—48)

すべての人々が断食に対して大きな注意を向ける必要があります。もし私たちが時折断食を行ない、加えてしばしば祈るのでなければ、親しみを込めて主に近づくことができるよう本当に主を呼び求めたことにはなりません。ほとんどの個人的な問題はそのように行なうことで解決できます。主は容易に悪霊を追い出しておられるのに、なぜ自分たちにはそれができないのか弟子たちが尋ねた時、救い主が何とお答えになったか、皆さんは覚えているでしょうか。主はこう言われました。「このたぐいは、祈りと断食とによらなければ、追い出すことはできない。」(マタイ 17 : 21)

私たち一人一人がさらに多くの断食献金を納めて、教会中の聖徒たちが同様のことを行なえるよう励まそうではありませんか。「貧乏人のラザロにパンくずしか与えなかった金持ちに、日の光栄の栄光を得られるなどと思わせないようにしようではないか。」(ハイラム・M・スミス、ジャーニー・M・ショダール、*The Doctrine and Covenants Commentary* 「教義と聖約注解」p. 480) 栄光を得るにふさわしくなるためには、人は自分の持てる財産を貧しい人々や困っている人々に惜しみなく分け与えなければなり

ません。

惜しみなく与えて下さい。そうすることであなた方自身が成長できるでしょう。貧しい人々のためにだけ与えるではありません。あなた方自身の幸福のためにも与えるのです。

自分の持てる財産や時間を捧げることによってあなた方自身を神の王国に捧げることができるよう十分に与えて下さい。天の祝福を得ようとするならば、正直に自分の一を納め、断食献金を惜しみなく捧げて下さい。このように行なうすべての人々は霊的な事柄についても物質的な事柄についてもその繁栄が増し加わることを約束いたします。主はあらゆる人々に、その行ないに応じて報いて下さるでしょう。

私たち一人一人がこれらの基本原則を学んで応用し、そこから約束された報いを得ることができるように祈るものです。

ホームティーチャーへの提案

1. 断食の祝福について自分の気持ちや体験を述べる。また、家族にもそれぞれの気持ちを述べてもらう。
2. このメッセージの中に、家族で朗読したり、話し合ったりするのによい聖句や引用文がないだろうか。
3. 断食と貧しい人々への援助の関係について話し合う。また、なぜ「祈りの効力は貧しい人々に対する私たちの寛容さにかかっている」のだろうか。(アルマ 34 : 28参照)
4. 訪問する前に、事前に家長と話し合っておく必要がないだろうか。断食と断食献金について定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージがないだろうか。

18 86年の12月のある日、メアリー・アン・ストークス・リッチは、昏睡状態に陥っている彼女の6歳の子供を陰しい目つきで見つめていました。妊娠中彼女は栄養失調だったため、生まれてきた赤ちゃんは先天性のくる病にかかっている、弱々しい声で泣いてばかりいました。メアリー・アンは同じような事情ですでに4人もの子供を失っていました。それに彼女の夫はアイダホのキャシア・カウンティにあるやせた農場に、妻と6人の子供を置き去りにしてどこかへ行ってしまったのです。

メアリー・アンは悲嘆に暮れ、こんな苦痛と赤貧の暮らしをさせるくらいなら、早く息子を天に召して下さるようお祈りしよ

うとひざまずきました。しかし実際はそれどころか、息子の命が助かり、自分が年老いても、息子が自分の慰めや恵みになるよう嘆願していたのでした。

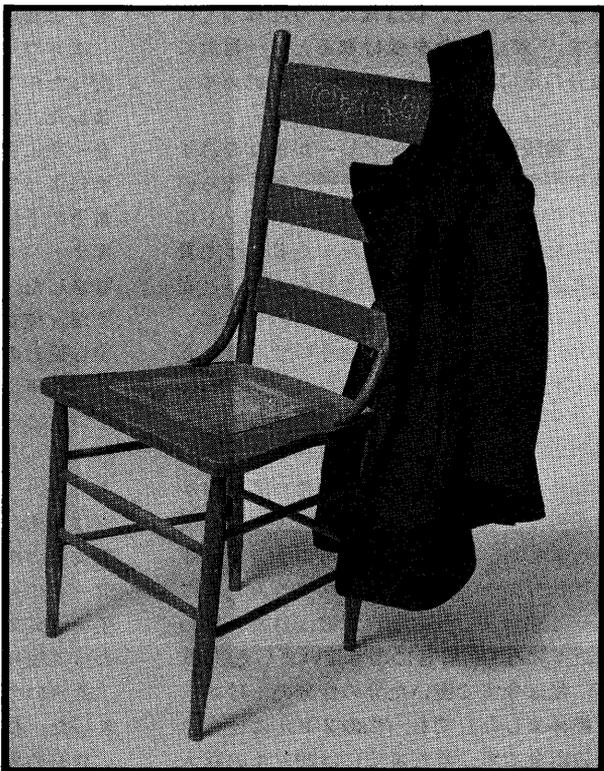
彼女の祈りはかなえられました。エドワード・ストークス・リッチは立派に成長し、後にメアリー・アンが年老いて体が弱ってきた時も、生活の面倒を見てくれました。

エドワードが生まれた後間もなく、メアリー・アンは子供たちと共にソルトレーク・シティーへ移り、助産婦やコック、掃除婦などの仕事に就きました。しかし彼女の乏しい収入だけでは一家の必要なものを賄うことはできず、エドワードは12歳になると学校を辞め、ソルトレーク・トリビューン

自分の一とオーバーコート

エドワード・ストークス・リッチの生涯から

キャロル・リッチ・ブラウン



という新聞社に夜勤で働きに出ました。

数カ月の間、メアリー・アンはエドワードの什分の一を貯金していました。それが5ドルに達した時、彼女はエドワードにこう切り出しました。「エディ、私はまだお前の什分の一を納めていないのよ。お前は毎晩仕事の行き帰りに何キロも歩かなきゃならないのに、暖かいオーバーコートさえ持っていないものね。冬になると、お前が帰ってくる明け方の4時か5時頃はひどく冷え込むのよ。だからお母さんはお前にこのお金を返そうと思っているの。そうすれば什分の一に充てることもできるし、何ならオーバーを買うこともできるでしょう。どっちにするかは、お前が自分で決めるのよ。」

エドワードは母親が思っていた通りの決断を下しました。彼は後にこう記録しています。「私はお金を受け取ると、一目散に監督の家に駆けつけ、什分の一を納めました。」

1週間後、おばのメアリーが彼女の息子のお古のオーバーコートを持って、彼らの家にやって来ました。それはエドワードにぴったりで、什分の一のたった5ドルで買えるようなコートなんかよりも、ずっと立派な物でした。エドワードはその日以来、什分の一やその他の捧げ物をいつも惜しみなく納めるようになりました。

エドワードが伝道から帰ってきた頃は、世の中は不景気で就職難の時代を迎えていました。彼はほとんどお金を持っていなかったため、この事態について断食し、お祈りしました。すると、手持ちの2ドルをすべて什分の一として払うべきだとみたまによって感じました。それで彼は11月の終わり近くになり、監督にこう言いました。「監督、私は今まで働いた分の什分の一はすべて納めました。でも、この2ドルは什分の一の前金です。暮れまでには20ドルの収入

を得たいんです。」

次の日も、エドワードはいつものように職探しで、ソルトレーク・シティーにある事務所や会社を回っていました。彼が最後の事務所を後にしようとした時、その雇い主が彼を呼び止め、ユタ州のプライス（ソルトレーク・シティーから約200キロ離れた所）にある地方新聞社になら仕事があると教えてくれました。

会社が交通費を負担してくれたので、エドワードは次の日プライスに行き、早速仕事に就くことができました。彼はクリスマスまでに、時間外労働も含めて21ドル50セントの収入を得ました。20ドル分の什分の一は前払いしてあるから、少しゆとりが出るので、「これでクリスマスの買い物ができる」と彼は思いました。

エドワードは忠実で従順な上に仕事熱心だったので、仕事ではかなりの成功を修めました。何年か後に妻を失い、10人の子供を一手に引き受けた時も、彼はいつもみたまによって力強く支えられてきました。一番下の子供が高校生の時、エドワードはレオナ・ハイドという女性を愛するようになりました。しかし当時彼は59歳だったので、彼女は19歳も年下で、彼には結婚を申し込むのがためらわれました。それに彼ほどの年になって、また新しい家庭を築くということも心配の種でした。しかし断食し、祈った結果、彼は導きを受けました。こう書いています。「揺るぎない確信が心の内に生まれてきたので、私は迷うことなく彼女との結婚に踏み切った。」また主はエドワードにもう一度結婚生活を送るための人生を備えておいて下さることを、みたまによって知りました。

そういう経緯で、彼は新しい家庭を築きました。私はその家族の一員です。

やもめ暮らしをしていた何年かは経済的

に苦勞していたので、母と結婚した当時も父は文無し同然でした。その上彼は自動車事故で重傷を負ったため、体に支障をきたし、印刷の仕事が続けることがもはや不可能になってしまいました。そのため、割に合わない職を転々とする憂き目を見ることになったのです。しかしそんな状況の下でも、彼は什分の一や捧げ物を納めるのをためらったことは決してありませんでした。初めの内は、以前にあつらえた上等のスーツを売り、中古のものにするというようなことも何度かありました。それでもこまめに貯金し、多くの事を犠牲にしてきたので、私たちは簡素な家を手に入れることができました。また退職後のために貯金も始めるようになりました。

しかしお金に困っていた時でさえ、監督からワード部予算や建築基金のチャレンジを受けた時は、父は必ずチャレンジされた額よりも何ドルか多く払っていました。彼は何年間か監督を務めて、ワード部はかなりの額の献金を必要としていることを知っていたのです。「私たちは主が与えて下さった物に優る捧げ物をするにはできないんですよ」と彼は自信に満ちた笑顔でよくこう言っていたものでした。

父はずっと元気で働いてきましたが、80歳の時、白血病にかかってしまいました。しかし彼は、人生に喜びを感じている内は生き続けることができるという祝福を受けました。父は翌年も、春のチューリップやクロッカス^{カス}を愛でながら、喜びに満ちた生活を送りました。また私が大学の授業で学んだことを話すと、父はおもしろそうに聞きました。私は父と文学や天文学について意見を交換し合うのが大好きでした。父はその2科目が好きだったからです。でも私が一番好きだったのは、宗教学の授業で習ったことを話すことでした。父は監督とし

て、毎日聖典の勉強をするという目標を設定していました。実際彼は38年間ずっと、モルモン経を少なくとも年に2回、他の聖典もそれぞれ年1回は完読していたのです。

父の2回目の入院の時、医師からあと数カ月の命であるという宣告を受けていたので、何度目かに見舞いに行った時、父が家へ帰りたいたいと言いついた時にはさすがに驚きました。それから1週間後、父は眠りの内に息を引き取りました。次に紹介するのは父が残していった証です。「捧げ物が何であれ、主は私にいつもお返しをして下さい。私には必ずしも金銭的な形を取るとは限らないけれど、私たちは主が下さった物に優る捧げ物をお返しすることはできないのである。私たちがどんなに多くの捧げ物をしてそれを上回る物を主は返して下さいから、私たちはいつも主に負債があると感じるのである。」

話し合い

「什分の一とオーバーコート」を読んだ後、福音の勉強をする上で、次の質問を読み各々で、あるいは家族で考えてみましょう。

1. 祝福はいつも、什分の一や他の戒めに従った後すぐにやってきますか。またそのような祝福を期待するべきですか。
2. 教会への捧げ物にはどのような種類があるでしょうか。何種類の捧げ物の名前を挙げられますか。
3. 断食や断食献金について最近なされた勧告を読み、話し合ってみましょう。またあなたやあなたの家族が什分の一を完全に納めていない場合、この大切な戒めを守る手助けとするために、家族や個人でどのような目標を定めることができますか。

19 70年12月の初め、私はワード部の聖餐会でクリスマスの奉仕というテーマのお話をするよう依頼を受けました。

その話の中で、私は、「貴い危険——クリスマスのお話」と題するロイド・C・ダグラス（ミルーテル教会牧師、作家、1877—1951）の書いた一篇の物語を引用しました。

それは、フィル・ガーランドと呼ばれるひとりの男とその妻シャーリー、それにふたりの子供ポーリーとジュニアの物語です。その日のクリスマスイブに限って、フィルはいらだった不機嫌な様子を見せていました。失業したばかりだったのです。家の経済状態は、働いていた間でさえ苦しかったのに、今となってはもうどうしようもないように思われました。

その晩シャーリーは、夫に、ポーリーやジュニアと一緒にクリスマスイブを楽しく過ごしたいと持ちかけました。ところが夫のフィルは、プレゼントは金がかかるとこぼすだけです。フィルは、妻に向かい、苦しい経済状態の中でプレゼントを買う余裕などどこにもないことを強調しました。「とにかく、今じゃクリスマスは金もうけの道具だからね。」シャーリーはポーリーとジュニアを着替えさせて、ベッドに連れて行きました。そして、あふれる涙を抑えながら寝室へ入って行きました。

その数分後、シャーリーを呼ぶフィルの声が玄関口の通路から聞こえてきました。大声で、ベンチを持って来るように叫んでいます。「針を踏んづけてしまった。」

折れた針

ブレント・A・バーロー



シャーリーがペンチを渡すと、フィルは足の裏に突き出た針の頭を締めつけ、えいっ！とやりました。なんと出てきた針は半分だけです。フィルとシャーリーは、病院へ行って折れた針の残りを引き抜いてもらった方がいいかどうか考えましたが、フィルの判断で翌朝まで待つことにしました。

次の日はクリスマスでした。フィルは病院まで車を飛ばしましたが、入口の前でふと立ち止まりました。もし小さな金属片が体内に入って出て来なければ……フィルはどこかで聞いたそんな話を思い出しました。その金属片は体の中を循環してついには生命器官に入り、その人は死んでしまう。フィルはなぜか、足の中の折れた針をそのまま放っておいて、たとえそれがどのような結果になろうとも、これを甘んじて受けようと心に決めました。車で家に戻ると、シャーリーには、すっかり治療は終わったと告げました。

この時からフィルは自分がいつ死ぬかもわからない状態にあることを自覚し始めました。明日まで生命があるかどうか自分でもわからない、それならば残された日々を精一杯大切に生きよう。フィルはそう決心しました。クリスマスのその日、フィルは人が変わったようでした。妻に対しては親切を尽くし、子供たちの相手をしながら時間を過ごしました。これまでの長い間フィルにとってこんなにも家族が身近に感じられたのは、このクリスマスの日が初めてでした。

明日は死んでいるかもしれません。しかし、人生で大切なものを味わうことができたのです。しかも、不思議なことに金銭はもはやそれ程重要なものとは思われなくなってきました。

その翌日になりました。気づいてみると

フィル・ガーランドはまだ生命がありました。2日目、妻と子供たちには特別な思いやりを込めて接しました。その日が人生の最後の日になるかもしれないからです。それから来る日も来る日も、フィルはさらに長い時間をシャーリーやポーリー、ジュニアと共に過ごすようになり、片手間な仕事を毎日続けながら家族を支えていきました。

それから1年後、「貴い危険」はこの物語の始まり同様クリスマスイブに終わりを告げることになります。ガーランド家のお祝い、去年のクリスマスとは正反対のものになりました。それはフィルが幸福で、心が平安な思いで満たされていたからです。とうとう、妻や子供たちと一緒にクリスマスを祝える時まで生き伸びることができたのです。

クリスマスイブの晩、フィルは子供たちと幾つかのゲームを楽しみました。それから、家族で、その年の間にそれぞれがこしらえてきた小さなプレゼントを交換しました。フィルは数カ月ほどかけて、シャーリーのためにクルミの木で美しい裁縫箱を作りました。フィルの優しい心づかいに、シャーリーの目には大粒の涙があふれてくるのでした。

その夜、時計の針が12時を告げ知らせる頃、シャーリーは自分のプレゼントをフィルに手渡しました。そのプレゼントの中には、赤いビロードに刺し通した小さな折れた針が入っていました。そうです。フィルが自分の足の中に置き去りにしたとばかり思っていた折れた針の残りの半分です。この物語はシャーリーが涙ながらにフィルの許しを乞うところで終わっています。シャーリーはあの事故の2、3日後にその残り半分の針を見つけたのですが、黙っていたの

です。そのお陰でフィルが家庭に戻ってきたのです。

去年のクリスマス以来どんなに自分の人生が変わったかわかっていたフィルは、シャーリーを抱き寄せ、涙をぬぐうように言いました。「今晚はクリスマスなのだから。」

この話は教会員たちを喜ばせたようでした。後に別の機会でお話の割り当てを受けた時、私は優先順位を正しく決めて家族と共に過ごすことの大切さを強調するために、もう一度この話をしました。

さて、私は1971年に大学での学位を取得して、イリノイへ移り、南イリノイ大学で教鞭をとることになりました。そして数カ月後、ダグラスの物語が私の心にまざまざとよみがえるような特別な体験をしたのです。

それは土曜日のことでした。教会の指導者会に出席する準備を始める前にテストの採点を済ませてしまおうと、私は朝早くから起きていました。どうにか時間に間に合わせて着替えをし、家を出ようと広間を横切って寝室の方へ走って行きました。

ところが、廊下を過ぎようとした瞬間、突然左足の先端に激痛が走り、そのはなはだしさに私は床の上に引っ繰り返って足をつかみ上げました。針を踏んづけてしまったのです。助けを求める声に妻のスーザンと子供たちが傍らに駆け寄って来た時には、私は尻もちをついたまま自分の足を抱え込み、苦しみうめいていました。

すべての出来事が痛ましい程に酷似していました。スーザンがベンチを取ってきたので、私は針を引き抜こうとしました。でも針は少しも動きません。妻と私はすぐに病院に出かけることで一致しました。足に針が刺さったままでしたが、自家用のステ

ーションワゴンを運転することができました。しかし、フィル・ガーランドの場合とは別で、私の場合は針が足の中に入っているかどうか考える必要はまったくありませんでした。

午前6時頃、足を引きずりながら急患診療室に通されると、私は看護婦に事の次第を説明しました。数分後に医者が入って来て若干の予診をしてくれました。針はだいぶ深く足の裏に食い込んでいて、外科医を呼んで取り除いてもらわねばならないだろうとのことでした。私に、手術台の上に横になって、外科の先生が到着するまで待っているように命じると、その医者は私をひとり残して出て行きました。私がそこで待っている間ほぼ40分近く、だれもいなくなった手術室はひっそりと静まり返っていました。その間、私は、自分の生命が危険にさらされていることを人が自覚した時、残された最も大切なものについて真剣に考えていました。私は去年フロリダのタラハシーで話したクリスマスの物語をすぐに思い出しました。なんという皮肉でしょう！こともあろうに、物語を紹介したこの私がフィル・ガーランドの体験を繰り返しているのです。あまつさえ、気づいてみると主人公様自分の死に——そしてさらに、死よりもっと大切な「生きる」ということに心を奮われていました。

やっと外科医が現われて、私の足を調べ始めました。私はこう尋ねました。「小さな金属が体の中に入って、もしそれを摘出しなかったら、人が死ぬこともあるってというのは本当でしょうか。」その外科医は笑いながらこう言いました。

「私も前にそんな話を聞いたことがありますよ……本当かどうかは私にもわかりま

せんね。でもあなたの場合は心配はいりません。」彼は言葉を続けてこう言いました、「数分で針は取れますよ。」

外科医の先生が私の足の手術にとりかかると、自分が宣教師時代に何度も引用した聖句がまた思い出されてきました。「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、……」（Ⅰコリント15：22）象徴的な意味で（と私は考えました）、私たちはだれもが皆自分の体の中に小さな金属片を持っているのかもしれない。主はそれを死すべき肉体と呼んでおられます。私が自分もいつかは死ぬであろうことを生まれて初めて完全に悟ったのはその時であったと思います。

手術が終わると、私は家族の待つ我が家に戻りました。家族に対して今まで感じたことのない程いとおしい気持ちが湧き上がってきたのはその時です。

結局私の足は完治しましたが、その体験がもたらした鮮烈な印象は決して私から離れ去ることはありませんでした。以来、私は人生の意味について真剣に考えてきました。この人生の目的は何なのでしょう。最も大切なこととは何なのでしょう。私は自分の時間を一番何に費やしているのでしょうか。

ヘンリー・デビッド・ソーロー（米国の作家、1817—62）の語ったある言葉は私たちに一筋の光を与えてくれます。ソーローはマサチューセッツ州にあるウォールデン湖畔の森の中に居を構え、次のように言いました。「なぜなら、私は目的を持って生き、人生の本質的な事柄とのみ向かい合うことを願っているからなのです。そして、その教を学び得たか否かを確かめ、死の間際に至って自分が真実生きたと言えるようで

ありたいのです。生命のない生活を送りたいとは思いません、生きるとはそれ程かけがいのないものなのです。」（*Masters of American Literature* 「米文学の巨匠たち」 p.405）

今では私にとってクリスマスは以前にも増して大切な日になっています。それは主に、救い主の誕生、生活、死、そして復活のすべてがさらに深い意味を持つようになったからです。また私には救い主が次のように語られた時のその言葉の重要性がわかり始めてきました。「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。」（ヨハネ10：10）ここに言われた豊かさの一部分は明らかに、愛する者たちと共に生きることの喜びを言っています。私たちの子供は成長し、彼らの祖父母は年老いていきます。しかし、年ごとに迎えるクリスマス——いや一日一日が、ささいな煩い事で台無しにしてはならない、かけがえのない日々なのです。私たちはさらに多くのクリスマスの季節を家族で共に過ごせるように願っています。たとえそれが無理でも、せめて家族が一度はゆっくりと集まれるクリスマスにしたいと願っています。

私はこの「貴い危険——クリスマスの物語」を捜して一冊購入しました。クリスマスの季節になるたびにこの本を読み返し、自分の歩んできた今までの人生やこれからのことなどを思い巡らしています。そして、あの針は、フィル・ガーランドにまねて小さな箱の中のピロードの布に刺して化粧台の引き出しにしまいました。人生の無常や優先順位をつけることの大切さを絶えず思い出すためのよすがとするためです。私にとって、どんな時にも忘れてはならない貴重な贈り物なのですから。

クリスマスカード

ドーン・ウォーカー・ネイラー

19 78年12月の初め、クリスマスカードのあて名書きをしながら、脳裏にはクリスマスの準備のことがうずまいていました。私は住所録に載っている名前をAからZまでひとつ残らず、丁寧に見ていきました。Nのところきた時、夫の父親の名前とソルトレーク・シティーの住所に目が留まりました。夫のデビッドがいつの日か父親と連絡を取りたいと思う時が来るかもしれないと思って、つい最近その住所を手し、住所録に書き留めたばかりだったのです。私たちはそこからほんの数キロのユタ州、レイトンに住んでいました。

デビッドは、両親が離婚したためにわずか6歳の時に父親と別れたままでした。その後、デビッドの父親はカリフォルニアに移り、再婚して、そこに長い間住んでいました。一方、デビッドは父親に見捨てられたと思いながら大きくなりました。そして、若い頃の何年間かをあちこちを転々としながら過ごしたため、父親と息子は30年近く互いに消息が絶えたままでした。

デビッドはひどく哀れさを感じていました。父親の記憶はぼんやりとしかなく、その記憶も時がたつにつれてゆがんできたのだそうです。それでデビッドは父親と再会したいとは思わないと言っていました。しかしデビッドの父親と同居していたデビッ

ドの父方の祖母が、デビッドの家族のひとりとして連絡を取っていたため、彼女から住所を得ることができたのでした。

私は住所録の名前をじっと見つめながら、この情報があっても何にもならないと思いました。ただ名前と住所だけで、心にも気持ちの上でも何にも思い出せないのですから。顔さえも。それでもじっと名前を見つめていると、突然この人にクリスマスカードを出そうという強い気持ちを覚えました。私は自分に問うてみました。でもその気持ちを打ち消すことはできませんでした。

もしその人が私たちの消息を聞きたくないとしたら、また我が家に来てほしいと思うような人でないとしたら、どうしよう。次から次に疑いがわいてきます。しかしそれとは反対に、クリスマスカードを出そうという気持ちはますます強くなり、とうとうカードを送ることに決めました。夫がどういう反応を示すかわからないのに、私は夫が仕事から帰宅する前に出したほうがよいと思いました。私は注意してこれとは違うカードを選び、封筒にあて名を書いて、中に短い手紙と我が家の電話番号を書いた物を入れました。事は終わり、私はカードを投函しました。さあ今度は夫にどう話しかを考えなければなりません。

その夜夕食が終わって、デビッドが新聞



を読んでいる時にその機会を見つけました。穏やかに私は自分がしたことを話し、夫の返事を待ちました。しかし何の反応も帰ってきません。私はもう一度自分のしたことを話しました。この時は夫の手から新聞がすべり落ちました。夫は私の顔を見て、ふさわしい人と結婚したのだらうかというような顔をしていました。

数日が過ぎ、私はクリスマスカードのことは忘れていました。そうしたある晩、電話が鳴りました。何気なく受話器を取ると、男性の声で「デビッドの父親ですが」と言うではありませんか。私はただもう驚いて、やっきになって夫の注意を引きながら、気のきいた言葉のひとつも言おうと考えました。

私が弱々しい声で、「まあ、クリスマスカードを受け取って下さったのですね」と言うと、「皆さんからたよりがあるのをずっと待っていたんですよ」という答えが帰ってきました。私は少し口ごもりながらも何とかこう言いました。「デビッドとお話しになりますか。」そして当惑している夫に受話器を渡しました。

デビッドと父親が話しているうちに、親子が再会する時と場所が決まりました。それから数日、とても不安な日を過ごした後、私たちはデビッドの父親の家を訪ねました。

私が玄関の呼び鈴を鳴らすと、男の人が現われて自己紹介をしました。家の中には奥さんと子供たち、それにデビッドの出生に居合わせた祖母がいました。祖母は小さい頃のデビッドをはっきりと覚えていました。

彼らは皆、私たちの到着を心待ちにしてくれていたのです。すぐに私たちは気持ちが悪くなりました。部屋をじっと眺めていると、暖炉の上の棚から私にほほえみかけているキンボール大管長の写真に目が留まりました。私はこれでよかったのだと思いました。

30年振りの父と息子の再会がどんなであったかはとても言葉では説明できません。しかし、その時のふたりのうれしそうな顔を私は決して忘れないでしょう。義父一家が、私たちが家族として望んでいた通りの家族であったことを実感して、私たちはとても心が和み、幸せを感じました。その夜は長年の積もる思いや情報を語り合い、将来も会う計画が立てられました。この再会において天父が大きな役割を果たして下さったのをだれもが感じたと思います。

夫が父親との再会を喜ぶ姿を見て、やっと天父を捜し出した人々に対する天父の反応もきっと同じに違いない、そう私は思いました。「あなたから便りがあるのをずっと待っていたんですよ。」

❖ 四福音書の中の福音 ❖

ロバート・G・パッチ

新約聖書の四福音書を学び始める場合、あらかじめ各書の背景となるものについて基礎知識を得ておくなら、より容易な理解が得られるでしょう。この記事の中で、パッチ博士は「福音」という語の意味、また、新約の最初の四書がなぜ福音書と呼ばれるのか、それぞれに異なる四書がキリストを証するという共通の一点において、どのように強め、補い合っているかを論じています。



「福音」という訳語の原語となったギリシア語には「喜びのおとずれ」「良い知らせ」などの意味があります。

イエスが最初にこの言葉を用いたのが、ナザレの会堂においてであることは明らかです。この時イエスは、御自分が福音を宣べ伝えるために神から油注がれた者であると説明されました。(ルカ 4 : 18 ; イザヤ 61 : 1 参照)

しかし、福音とは果たして何なのでしょう。近代の啓示はその完全な意味を明らかにしています。教義と聖約には、イエスが世に来たりたもうて世のため十字架につけられ、世の罪を負い、世を聖くし、滅びの子を除くすべての人を救うことによって

御父の栄光を輝かすことが具体的に語られています。

他のふたつの啓示の中では、悔い改めと水のバプテスマ、「王国の平和なること」を教える火と聖霊のバプテスマなどの重要な教えが福音の中に含まれるとされています。

モルモン経には、選ばれた12人の弟子から教会の名前について質問された時の答えとして、「もしわが名をつけて、わが福音を基となさば、そはわが教会なり」という救い主の説明が載っています。(IIIニーファイ 27 : 1—10)

イザヤ書や教義と聖約の中に見られる概念に加えて、主の福音にはさらに4つの概念を含めることができます。キリストが天父のみこころを行なうためにこの世にいられたこと、また、人類は裁きのために引き上げられること、世の人々が裁きを受けること、キリストがそのみ業によって天父の栄光を表わすことがその4つです。(IIIニーファイ 27 : 13—14, 16, 19)

ですから、近代の啓示によって余すところなく明らかにされているように、「福音」という語には次のような意味があることとなります。

1. イエスの使命は御父から授けられ、御

父に栄光を帰すためのものである。

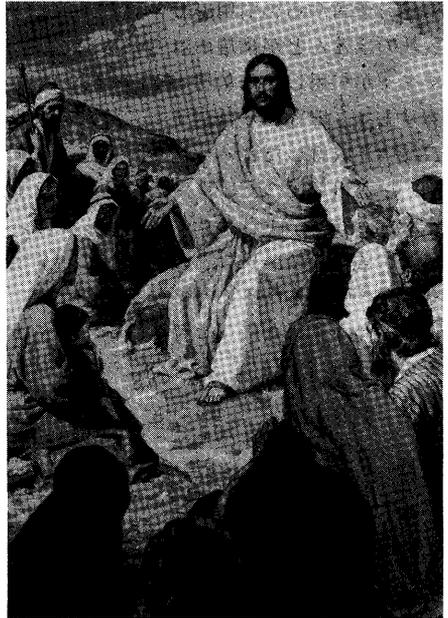
2. イエスの贖いの犠牲と十字架上の死によって、世の人々は罪の清めを受ける。
3. イエスは御自身の復活を通して、死の獄の扉を開いた。
4. 当時のユダヤ人たちが御子を十字架にかけて裁いたように、御父は人々を引き上げ、御子によって裁かせる。
5. 悔い改めよとのメッセージは、地の果てまで宣べ伝えられる。
6. 信仰、バプテスマ、聖霊によって聖められた人だけが、罪の汚れを洗い落とすことができる。

これらを考えると、確かに福音のメッセージは「良きおとずれ」と呼ぶにふさわしいことがわかります。その一般的な意味はモルモン経、また教義と聖約の中のナザレのイエスの言葉の中に示されています。

しかし、ほとんどのキリスト教徒は、良きおとずれすなわち福音は4つの福音書の中に記されていると考えています。

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネは多くの共通史料を用いましたが、他の人が作った写しをそのまま用いることはしませんでした。4つの福音書の中に類同点が数多く見られるのは興味深いことです。マタイ、マルコ、ルカの三書は特に類同点が多く、共観福音書と呼ばれています。しかし、概要、細部ことごとく一致しているというわけではありません。ヨハネの史料、視点は他の三書とはまったく違っています。

にもかかわらず、少なくとも18の短い話が四書に共通して記録されています。特に極立っているのは、イエスの生涯の最後の週より前にあった4つの出来事が、マタイ、



マルコ、ルカ、ヨハネの4人全員によって記録されているという点です。バプテスマのヨハネと彼の伝道、救い主のバプテスマ、イエスがナザレで拒まれたこと、5,000人に食物を与えた時のことがそうです。

4つの福音書に共通して記録されている出来事の中で、他の14は復活の前の週にイエスがエルサレムに勝利の入城をした後に起きたものです。イエスの生涯の内、受難の週とも言われる最後の1週間は、新約の中でも最も実証的に記述されている部分です。

●マタイによる福音書

マタイによる福音書のふたつの特徴は、

❖四福音書の中の福音❖

旧約の予言からの引用が多い点と、重要な説教のほとんどが網羅されている点です。マタイが引用した旧約聖書の句は100以上あります。旧約の予言がイエス・キリストにおいて成就したという視点が感ぜられます。しかしひとつだけ重要な例外がありました。それは、キリストのメッセージは、律法学者たちの偏狭な思いとは逆に、全世界に宣べ伝えられることになるという点です。福音は異邦人にも伝えられることを示唆する旧約の聖句を、マタイは一箇所引用しています。(マタイ12:19—21)

マタイによる福音書のもうひとつの特徴は、イエスの説教のほとんどが載せられている点です。その中には特に大切な6つの説教も含まれています。最初の説教は、義を特に強調した山上の垂訓です。(マタイ5—7)しかし、すべてに通ずる普遍的な教えも含まれています。次のイエスのみ言葉はその一例です。「あなたがたは、地の塩ある。……」(マタイ5:13)「あなたがたは、世の光である。……」(マタイ5:14)

2番目の重要な説教は十二使徒をつかわすに際して与えられたものです。この初期の伝道に関して、イエスは「異邦人の道に行くな。……むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところに行け」と指示を与えられました。(マタイ10:5—6)後に全世界への伝道が開始された時、キリストは重要な命令を与えられました。マタイ28:19にこう記されています。「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子とし……。」

第3の説教はたとえ話が幾つか続くものです。マタイ13章に記録されています。な

ぜこれらのたとえ話が、一本の糸に通されたビーズのように並べられているのかを不思議に思う人もいますが、「教会概史」(*Documentary History of the Church*, 2:264—72)の中にその最も良い説明を見出すことができます。真理を全世界に広めていくことの大切さが、この一連のたとえ話の中によく言い表わされています。

種まきのたとえ話は福音が宣べ伝えられていく時の様子を描き、毒麦のたとえ話は背教について物語り、からし種のたとえ話は終わりの日に教会が打ち建てられることを言っています。さらに、パン種のたとえ話は教会に与えられ、最終的には全世界に広められていく啓示を示唆し、真珠のたとえ話はシオンの受け継ぎについて教え、魚を取る網のたとえ話は、ヨセフの子孫が福音を全地に宣べ伝えていくことを暗示しています。これらのたとえ話の意味はひとつの場所や国家に限定できるものではありません。

第4の説教は罪と罪の赦しの問題について論じています。(マタイ18章参照)天父は小さい者が心を傷つけられたり、墮落したりすることのないように望んでおられることを、イエスは教えて下さいました。兄弟の罪を何度まで赦すべきかというペテロの質問には、罪の赦しに対する人々の一般的な考え方がよく出ています。しかし、「七たびを七十倍するまで」赦さなければならないというイエスの答えは、そのような不寛容な精神を可とするものではありませんでした。

マタイ23章の第5の説教は、律法学者やパリサイ人の為善を非難するものです。

●マルコによる福音書



第6の説教はこの世の終わりに関する予言的な教えでした。(マタイ24) 予言者ジョセフ・スミスがこの章を改訳したものが高価なる真珠の中に収められています。ここでキリストは、御自分の死の後に来るエルサレムの滅亡について語った後、それに対応する終わりの日の様々な出来事を詳細に話しています。

マタイは、教会は将来全世界に広がることをはっきりと理解していました。それは重要な使命に関して記した彼の記録の中に明らかです。「あなたがたは行って、すべての国民を弟子として……見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ28:19-20)

マルコによる福音書は四福音書中最も短いものです。この福音書にはペテロの思ひ出を基本的資料として用いていると推測する聖書学者もいます。

しかしひとつの独立した記録として、この福音書の中にも劇的な事件、細部描写、見識が見られます。

第1章冒頭の「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」という表現には、福音の原点ともいべき何かを宣言しようという意志が感ぜられます。マルコにとって福音の「はじめ」とはどのようなものだったのでしょうか。マルコは具体的な事実をあげながら、イエスが死に打ち勝つ力を持っておられたこと、またイエスが安息日の主であり、十二使徒を聖任し、死人をよみがえらせ、モーセの律法の細部にわたる規定に対する正しい認識を与え、メシヤであると自ら公に宣言なされたことなどを読者に信じさせようとしています。これらの点を考えると、福音の「はじめ」がキリストの神聖な使命を言っていることはまず間違いありません。マルコは十字架の後の出来事を、「イエスはよみがえって」(マルコ16:9)という天使の言葉でクライマックスに至らせています。

マルコはキリストの神性に関する記述とその使命に関する記述をひとつにまとめるために、どのように主題を展開しているのでしょうか。ガリラヤでの伝道を扱った初めの部分には、イザヤ61:1-2の投影を見ることができます。この予言は道を備える者としてのバプテスマのヨハネによって成

※四福音書の中の福音※

就されました。

マルコはキリストの神性を扱った記述の中で、イエスが神の国が近づいたと宣傳伝え、人々の罪を赦したこと、またイエスが安息日の主であり、病氣、霊、死を治める能力をあらわし、御自身の死を予告し、新しい契約の血が多くの人のために流されたと言われたことなど(マルコ14:24参照)、イエスが本当にメシヤであることを示す根拠をすべて記録しています。

マルコは天と地の主がなされたことを記録し、主の神聖な力と使命とを明らかにしています。マルコによる福音書は贖いのひとつの証です。

●ルカによる福音書

この福音書は「世界で最も美しい書物」と言われています。イエスの誕生の物語、放蕩息子、よきサマリヤ人のたとえ話などは世のキリスト教徒の心をとらえて離すことがありません。ルカは当時の女性たちが果たした役割に特別な関心を払いながら、歴史的事実、愛、霊的な事柄を書き伝えています。この福音書ではバプテスマのヨハネの母エリサベツ、イエスの母マリヤ、そして有名無名のすべての女性が重要な存在として描かれています。ルカはまた貧しい人、蔑視されていた人々にも特別な関心を寄せています。

物事に対する霊的なとらえ方という点において、ルカによる福音を凌駕するのは、同様の力点を持つ使徒行伝だけです。ルカはパウロの伝道の同労者として、教会の中に見られる聖霊の働きに認識を深め、救い

主のみ業の幅の広さに強く心を引かれました。事実、ルカの記録の中には、イエスが苦しみ悩む人、抑圧された人、目の見えない人などすべての人に手を差し伸べられたことが記されています。

ルカは、ひとりのみ使いがザカリヤにバプテスマのヨハネの使命について話した時のことを記録しています。ザカリヤは後にメシヤに関する予言をしています。マリヤも自分の子供が「いと高き者の子」と呼ばれるようになると、み使いから知らされていました。バプテスマのヨハネは、自分よりも「力のあるかた」がおいでになり、聖霊と火によってバプテスマを授けられると証しています。ルカはこの福音書の初めの部分から、ザカリヤ、マリヤ、シメオン、



バプテスマのヨハネらが皆、いと高き者がおいでになることを知っていたことを示しています。

また、神の子イエスが悪霊たちから「神の聖者」と呼ばれた時の様子や、(ルカ4:34)使徒を召し、病を癒し、罪の赦しを与え、群衆に食物を与え、身を変えられた時のことも記されています。最後の章には、イエスがエマオへ向かう道でふたりの弟子に教えを授けられた時の様子がかかれてい

ます。ひとりの罪深い女や中風に苦しんでいた男たちの例によく表われているように、ルカによる福音書の特に重要な主題は、悔い改めと罪の赦しにあります。イエスは弟子たちに互いに赦し合うようにと教えました。自らも十字架の上から尊い模範を示し、「父よ、彼らをおゆるしてください……」(ルカ23:34)と祈られたのです。ペテロも3度キリストを否定しましたが赦されました。最後の章には、悔い改めと罪の赦しが全世界に伝えられていくべきことが書かれています。(ルカ24:47参照)

●ヨハネによる福音書

この福音書は特異な方法で強調されたひとつの証です。「イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。

しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。」(ヨハネ20:30—31)証に関するこの主題

が特別な方法で強調されているのです。

第5章には、イエスがユダヤ人たちに証について教えられたことが記録されています。これはイエス御自身、またバプテスマのヨハネ、イエスのみ業、モーセ(彼らはモーセに信を置いていたものと思われる)、そして一度もそのみ声を聞いたことのない天父という証の源がだれにも聞かれていることを念頭に置いて書かれたものです。IIIニーフアイ11:31—36で、御父が聖霊の力によって証をなさると話しておられる点を考えると、イエスはこの時ユダヤ人たちに、聖霊の声に対して自ら耳を閉ざしていると言われたのに違いありません。

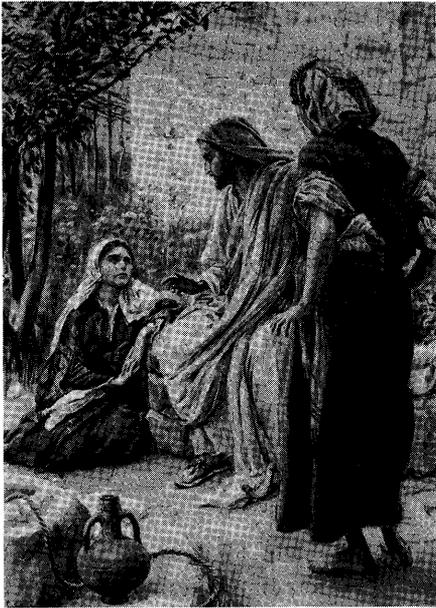
ヨハネにとって、イエスは真の過越しの子羊でした。彼は「見よ……神の子羊」というバプテスマのヨハネの証を書いているのですが、この言葉はイザヤ53:7を念頭に置いたもので、イエスが召しを果たしておられた時期の4度にわたる過越しをすべて言い尽くしています。

ふたりの強盗は足を折られましたが、イエスの場合はそうされませんでした。ヨハネは「これらのことが起ったのは、『その骨はくだかれないであろう』との聖書の言葉が、成就するためである。」(ヨハネ19:36)と説明を加え、特別の注意を払ってこの出来事を記しています。ヨハネは過越しのいけにえの子羊に関する規定から引用したのです。(出エジプト12:46)

●福音、背教、死

最後の書が書かれてから3世紀の間、新約聖書の諸書は、キリスト教世界に次々と

◇四福音書の中の福音◇



伝えられていきました。紀元2世紀には、キリスト仮現論（神には受肉することも、死ぬこともあり得ない。したがって、地上のキリストは神から遣わされた幻影・仮象に過ぎないという説）、モンタノス主義（小アジアのフィルギアでモンタノスが始めた運動。厳格な禁欲主義や世界の終末が間もなく来るとい説を唱えた）、グノーシス主義（ギリシアなどの諸思想を混合した異端説。神の世界と物質的世界を説く極端な二元論。救いを得るにはグノーシスすなわち秘密の知識が必要であると説いた）、モナルキア主義（天父のみが神であり、イエスは本質的には神性を備えていなかったとする説）の4つの異端が正統教会に、崩れかけていた権威を守るために、1世紀に書かれ

た使徒たちの文書を用いるようにと迫りました。

この時期、ヨハネの黙示録、ヤコブの手紙、ユダの手紙、ペテロの第二の手紙、ヨハネの第二の手紙と第三の手紙などは正典とはみなされていませんでした。ヘブル人への手紙はローマで受け入れられる200年前にアレキサンドリアで受け入れられていました。一方「十二使徒の教え」「ペテロの黙示録」「ヘルマスの牧者」「バルナバの手紙」「クレメンスの第一の手紙」など初めは正典とされていながら、後に除かれたものもあります。しかし、異端、背教、分裂のこの時代にも四福音書の霊的な力に深刻な疑いがさしはさまれることはありませんでした。

四福音書の霊的な力は証によるものです。マタイは「喜びのおとずれ」は全世界に宣べ伝えられなければならないと証し、マルコはイエスが贖い主であることを証しています。そして、ルカは罪の赦しがあることを証し、ヨハネの福音書は過越しの象徴が成就されたことを証しました。さらに、ニーファイ第三書は罪の清めを証し、教義と聖約は裁きについて証しています。そして、これらすべての書が復活を証しているのです。ヨハネはこう書き残しています。「わたしたちは人間のあかしを受け入れるが、しかし、神のあかしはさらにまさっている。」（Iヨハネ5：9）



「ソロモンの廊から」

T・エドガー・ライオン



キリスト教の教会の発祥について、その歴史上の事実を探究しようとする今世紀のキリスト教徒は、紀元1世紀に活躍したひとりの福音書記録者に多くを負っていることにすぐに気づく。ルカという名のこの医者は、ルカによる福音書と使徒行伝を著わした。彼の記録は、まさにキリスト教創設を告げる二大絵巻と言えよう。

ところが、ルカの記録したこのふたつの著作に目を通していくにつれて、こういうことを書き残してくれていたら良かったのだと思うことが幾つか出てくる。まずルカは、イエスの時代に教会が正式に組織されたことに関して何も述べていない。また教会の役員の名前や地位、権限についても記録はない。さらに、エルサレムのキリスト教徒のグループがどういう名で呼ばれていたか、それにユダヤ人のキリスト教徒たちが神殿や神殿の庭について、またレビ人の祭司が捧げる日々の犠牲やユダヤ教の安息日についてどういう姿勢で臨んでいたかということも、触れられていない。多分これらの記録を献じた相手であるテオピロが、こうしたすべての事柄を熟知していたために、あらためて記す必要はないと判断したのかも知れない。

教会の発展

使徒行伝は、ルカによる福音書に続けて、エルサレムにおけるキリスト教徒たちの動向を語ってくれる。復活されたイエスがオ
◀ソロモンの廊は、ギリシャやローマの広場と同じように、公開討論の場として用いられていたようである。

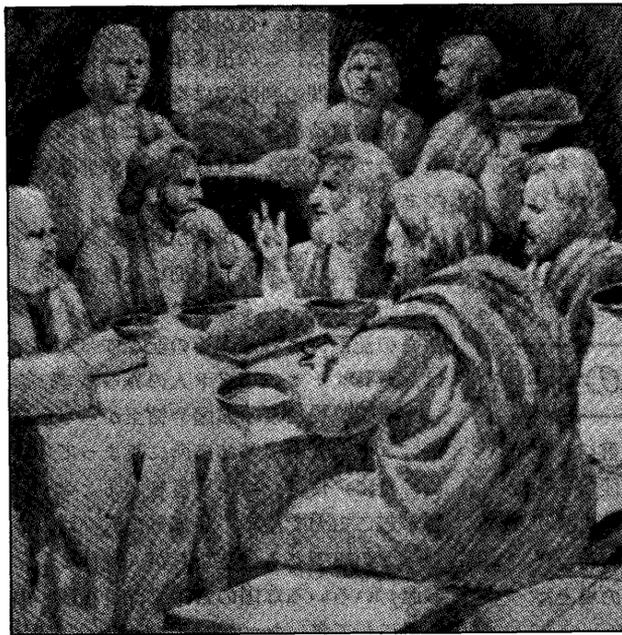
リブ山から昇天された後で、ルカの記録によればエルサレムの聖徒約120人の集う会が持たれた。(使徒1:15参照)ここでペテロは、生き残った使徒たちによってイスカリオテのユダの死のために生じた使徒の空席を埋める候補者を選定する必要があることを述べる。彼があげた資格はふたつあった。まず第一に、その者はイエスのヨハネによるバプテスマ以来ずっとイエスと行動を共にした者であること、そして第二に、イエスの復活を目撃した者であることである。彼らは候補者をふたり見つけた。資格的にはふたり共互角であった。そこで、人間の力ではどちらとも決めかねることを知っていた彼らは、主に祈り、どちらを主が選びたもうたか告げて下さるように願ったのである。その結果、彼らは靈感によってマッテヤを選び、彼が使徒の空席を埋めることになった。この出来事から、使徒たちが教会を人間の判断ではなく、みたまによって導かれるべきものであるととらえていたことがわかる。これは特筆に値することである。

続いてルカは、イエスが昇天されてから10日後の、ユダヤの五旬節に起きた驚嘆すべき出来事について読者に紹介している。ルカの記録によれば、その記念すべき日には、パレスチナのユダヤ人のみならず、ローマ帝国の15に及ぶ属国や領土からも信仰深いユダヤ人が大勢ある所に集まっていた。この日に、使徒たちが異言を語るという奇跡が起こるのである。集まった人々は、ガリラヤの出である使徒たちが(使徒2:7参照)いろいろな国の言葉で福音を説くのを目にして驚いた。(使徒2:1-37参照)

ペテロが、ナザレのイエスこそ復活したもうた世の贖い主であるとの証と共に、イエスがメシヤであることを宣言するのは、この後のことである。群衆はイエスをメシヤとして受け入れていなかったことを後悔し、ペテロに、どのようにしたらその罰から逃れられるか尋ねる。ペテロはその答えとして福音の第一原則を説くが、そのことについてルカは、「三千人ほど」の者がバプテスマの水をくぐってキリストの教会に加わったと記録している。(使徒2:37-42参照)

しかし、この少し後に起こった別の驚くべき出来事の後では、さらに多くの人々が改宗して教会に加入する。ペテロとヨハネが「祈りのとき」(使徒3:1)に宮に上ろうとしていたのだが、宮の庭に入ろうとす

ると、門の所にいた乞食こじきが施しを求めた。ペテロはそれを断わり、替わりに生まれながらにして足のなえていたその男を癒いやすしてやった。この奇跡は大勢の人々の目撃するところとなったので、ユダヤ人たちは群れをなして異邦人の庭(ソロモンの廊)に集まってきた。(使徒3:11)そこでペテロは彼らがどのようにしてナザレのイエスをメシヤとして拒んだかを語り、その罪深い行ないを悔い改めるように求めるのである。ルカは、ペテロの言葉には力があったので、「話を聞いた多くの人たちは信じ……その男の数が五千人ほどになった」と記している。(使徒4:4)



◀新たに見いだした兄弟としての絆に、このほか強い熱意を抱き、自分の所有するものをすべて同胞のキリスト教徒と進んで分かち合おうとした。

聖徒たちの「共有」生活

このふたつの出来事を通じて改宗した人は、新たに見いだした兄弟としての絆に、ことのほか強い熱意を抱き、またそれを守ろうとする決意も固かった。そこで彼らは互いの幸福を気づかうという福音の教えにのっとり、自分の所有するものをすべて同胞のキリスト教徒と進んで分かち合おうとした。こう記録されている。

「彼らの中に乏しい者は、ひとりもいなかった。地所や家屋を持っている人たちは、それを売り、売ったものの代金をもってきて、使徒たちの足もとに置いた。そしてそれぞれが必要に応じて、だれにでも分け与えられた。」(使徒4：34—35)

「信者たちはみな一緒にいて、いっさいの者を共有し、

資産や持ち者を売っては、必要に応じてみんなの者に分け与えた。」(使徒2：44—45)

私たちはこのふたつの記述から、エルサレムの聖徒たちの間で行なわれていた宗教上の財産共有制度をかいま見ることができ、西半球へのよみがえられた主の顕現の後に、ニーファイ人たちがこれと同じ財産共有制度をしき、それが2世紀もの間続いたが、これも同じ精神の現われであることは疑いの余地のないところである。(IVニーファイ1—27参照)

この時の教会の発展があまりにも急激だったので、十二使徒たちは毎日、食糧の取得と配給に全時間を費やすようになっていた。これが続く自分たちのイエスから受けた使命である福音の伝道ができなくなる

ことに気づいた彼らは、聖徒たちを集め、使徒が「食卓のことに携わる」ために召されたのではないことを教えた。そして、替わりにその務めを果たすために7人の男性を召すことを提案したのである。(使徒6：1—6参照)こうして、この責任を遂行する者として、7人の男性が使徒によって召され、按手任命された。

ルカはこの責任が何という職であるか、またどのような称号がつくのか記録していない。ところが後になって、背教した教派が執事にこの責任を与えたので、聖書の編者や注解者たちは、章の見出しや注のところに、「7人の執事」と書いたのである。しかし、ルカの記録したものには何も記されていない。かえってこの、人々の物質的な必要に応えるという務めは、監督に与えられた務めととらえる方が自然である。多分エルサレムの聖徒たちが7つの支部に分けられ、その一つ一つを、物質的な福祉を務めとする監督が管理したのではないだろうか。

エルサレムの聖徒たちがこの新しい経済制度を導入したということは、大いなるキリストの愛と信仰が彼らの間にあったことを示すものである。しかしながら、この制度も次第に行き詰まりを見せてくる。五旬節の日に教会に加わった人々の多くは、家や土地、店を売り払って、その金をすべて捧げた人々である。もしも彼らがエルサレムに家や土地や店を持ち、そこから得る収入をキリスト教徒の仲間のために出していたならば、自分の資産はそのままの状態、教会としての収入も安定したものになっていたであろう。しかし、財産を金に換えて

しまった彼らには、継続して収入を得る道がなかった。こうして次第に教会が発展し、貧しい人々が大量加入してくると、最初のふたつのグループが献じた巨額の金も、もはや底をついてしまうのである。

使徒パウロは、それから10年ないし15年後に小アジアとヨーロッパでユダヤ人と異邦人に福音を説いていた時に、経済的に逼迫しているエルサレムのキリスト教徒を金銭的に援助するよう、異邦人のキリスト教徒たちに呼びかけている。(Iコリント16:1—4; IIコリント9:1—8) この頃までにエルサレムの聖徒たちが金を使い果たしてしまったことは明らかである。

原始教会の安息日

エルサレムの聖徒たちは、キリスト教の安息日の普及に多大な影響を及ぼした。もちろん聖典には、古代のキリスト教徒たちがこの聖なる日をどのように守ったかあまり記されていない。しかしながら、古代のキリスト教の指導者たちが、ユダヤ人の、しかも信仰深い正統派のユダヤ人家庭で育てたことは明らかである。そうでなければ、メシヤの降誕など望まないとはいえなからである。したがって、成人であれば、彼らは会堂での安息日の礼拝には積極的に参加したに違いない。また金曜日の日没から会堂で行なわれる、安息日への準備のための礼拝にも参加したことだろう。彼らはそこで詩篇を朗詠し、祈りを捧げ、予言者の書やモーセの律法の中の聖句を朗読したと思われる。

この会堂での集会は、宗教上の礼拝ではなかった。律法学者(ラビ)が教師と

なり、会堂を学校にして子供や若者を集め、過日に十戒やモーセの律法、タルマッド(ユダヤ人の律法)を教えた。これらはユダヤ人の礼拝と人類への奉仕の基本をなすものである。

イエスもこの例外ではなかったと思われる。それは、イエスの教えの中に、律法や予言者に関する豊かな知識がにじみ出てい

この出来事から、
使徒たちが教会を
人間の判断ではなく、
みたまによって

導かれるべきものであると
とらえていたことがわかる。
これは特筆に値することである。

るからである。福音書には、イエスが安息日に、聖典の解説者として、またユダヤ人の信条や慣習の誤りを指摘する者として会堂に姿を見せておられたことが描かれている。(ルカ4:16—21参照)

当然のことながら、こうしたイエスの会堂への訪問には使徒たちも同行していたであろう。したがって、彼らにとって会堂を訪れることには何の抵抗もなかったはずである。事実ルカは、パレスチナの国境を出た宣教師たちが安息日に会堂を訪れ、求めに応じてイエスの死と復活をユダヤ人に説いたことを記録している。(例として使徒13:5, 14; 14:1; 17:1—2)

しかしながら、キリスト教徒の信仰がユ

ダヤ教を越えた段階で、その礼拝の様式も会堂で行なわれていたユダヤ教のそれとはもはや相いれないものとなってきた。例えば、父なる神への礼拝と双方に共通する聖句の解釈に加えて、キリスト教徒は新たに5つの礼拝様式を取り入れた。すなわち、(1)復活し昇天されたキリストへの礼拝、(2)主の晩餐である聖餐の記念、(3)男性に加えて婦女子も礼拝に加わる、(4)「詩とさんびと霊の歌」(エペソ5:19)を皆で歌う、(5)イエスについて見聞きしたことへの聖徒たちの証、この5つである。(T・E・ライオン、*Apostasy to Restoration*「回復への背教」p.34参照)

新約聖書には記されていないが、キリスト教の教会は、ある時点で礼拝の日をユダヤ教徒の安息日である土曜日から、週の初めである日曜日に変更した。多分これは徐々に変わっていったものであり、使徒が指示を出して一勢に変えたものではないと思われる。この変更は、贖罪と復活について理解を深めていった聖徒たちが、土曜日よりも主が死人の中からもみがえられた日曜日の方を重要と考えるようになったと考えれば、ごく自然の成りゆきと言えよう。また、特に異端者として会堂を追われてからは、自分たちの信仰がユダヤ教とは異なったものであることを明確に示したかったとも思われる。もうひとつ非常に現実的な要素がある。つまり、安息日を日曜日にするように主がお命じになったということである。

さて、私たちは、当時の人々がすべて週に一度の安息を喜んで受け入れたのではないことを知っておく必要がある。ローマ政府はユダヤ人に対して、安息日に仕事を休

むことを譲歩していたのだが、この特権を受けられることのできるのは、都市に住む者たちに限られていた。(キリスト教徒がこの権利をコンスタンチヌス大帝から受けたのは、紀元321年になってからのことである)

このことから、なぜ古代のキリスト教徒たちがユダヤ教の一般礼拝に固執していたかがわかる。ユダヤ教の安息日の恩恵に浴したかったのである。これにはそういった便宜的な問題だけでなく、良心に関する議論もからんできていた。すなわち、彼らには自分たちはイエスを主として受け入れることを拒んだ者たちよりも優れたユダヤ人だという自負心があり、ローマ政府からユダヤ人に与えられた特権を享受する資格のあるのは自分たちなのだと考えていたのである。

キリスト教徒の神殿(宮)への参入

安息日の礼拝が、キリスト教徒がユダヤの教えをその背景に持っていたために行なわれるようになったことは明白であるが、神殿に対する彼らの姿勢についても同じことが言える。使徒行伝を見ると、キリスト教徒は指導者、会員を問わず、キリストがお亡くなりになる前に同じように五旬節の後エルサレムの神殿に参入していることがわかる。そしてこの神殿参入がそれから四半世紀も続いたことが、聖書から明らかである。そのひとつとして、パウロが捕らえられたのは神殿の敷地内で行なわれたユダヤ人の儀式に参列していたことだった。(使徒20:26—33参照)

ユダヤ人のキリスト教徒たちが神殿に続けて参入したひとつの理由は、聖徒たちが自分たちを予言され聖典の中で語られた真のイスラエルとしてとらえていたからであ



キリスト教の教会は、
ある時点で礼拝の日を
ユダヤ教徒の安息日である
土曜日から、
週の初めである
日曜日に変更した。



る。彼らは、メシヤはすでに来られ、しかもそのメシヤを受け入れたのは自分たちだけであったと信じていた。つまり、イエスを拒み、十字架につけたユダヤ人は予言されたイスラエルとしての資格を失い、彼らの神の選民となる権利は奪われてしまったと考えたわけである。またアブラハムの契約の約束を受け継ぐ者として、自分たちには神殿の建物や敷地を使用する正当な権利があるとも考えていた。もちろん神殿を管理するユダヤ人たちが、自分たちが拒絶した相手であるキリストに従う者たちに神殿を明け渡すことはあり得ないことなので、キリスト教徒たちは神殿の外庭で満足しなければならなかった。その間神殿内では、神殿を管理する者たちが古くから行なわれてきた儀式を続け、捧げ物を捧げていた。それは、キリスト教徒がもはや効力のないものと信じていたものである。

キリスト教徒が神殿を継続して使ってい

た第二の理由は、その敷地が大勢の民衆を集めるのに格好の場所であったということである。そこは面積が14ヘクタールもあり、いろいろな宗教や国々の人々が宗教上の儀式や観光、それに商売にまでも利用することができたのである。

ここで記憶しなければならないことは、神殿がレビ神権しか持たない背教したユダヤ人によって用いられていたということである。神殿そのものは確かに美しく豪華なものであったが、建物の規模は小さかった。人が儀式のために集まるというよりも、イスラエルの神の臨在の象徴として建てられたものだからである。神殿内に入ることを許されたのはレビ人の祭司だけであり、女子ならびに他の支族の男子は足を踏み入れることができなかった。石造りの神殿に隣接して建てられていたのは、祭司のための部屋、議会（サンヒドリン）を行なうための大ホール、それにローマ帝国によって権限を与えられた役人が全世界のユダヤ人に対して統治を行なう事務所であるが、これらはすべて神殿とともに壁で囲まれていた。暴動などが起きた時にその聖なる場所が汚されないようにとの配慮からである。この壁の外がいわゆる前庭である。この壁に最も近い所にあるのがイスラエル人の男子の庭で、そこからイスラエル人の男たちが、神殿の東の屋外にある高い祭壇で日々燔祭を捧げるのを拝することができた。この庭の東に位置するのが婦人の庭で、女性は男性よりも聖所に近い場所に来ることができなかった。この婦人の庭の外側が最も面積の大きい広場で、異邦人の庭と呼ばれる。（異邦人の庭はソルトレーク・シティ

のテンプルスクエアと同じで、堀をめぐらしてあるにもかかわらず一般の人でも自由に出入りすることができた)

ヘロデは異邦人の庭の外縁を飾るためにギリシヤから大理石の柱を取り寄せ、庭の三方にそれぞれ3列に配置した。そして残りの王室の廊と呼ばれる部分には、162本のコリント柱が4列に並べられ、エジプトのカルナクにある異教の大神殿をほうふつさせるものがあった。一説によると、この神殿もギリシヤやローマの多くの神殿と同じように、日射や雨、また時折降る雪から守るためにレバノン杉の屋根が設けられていたのではないかということである。東側の柱廊はソロモンの廊と呼ばれる。(使徒3:11; 5:12; ヨハネ10:23)

ルカによる記述を見ると、当時のキリスト教徒は共有財産制をしいていたので毎日働くという義務がなく、その代わりに神殿の建物からやや離れた所にあるこの廊に集まっては会を開いていた。ペテロや他の使徒たち、それに食糧配付の任にあった者たちが指示を与えていたのがこの場所である。このソロモンの廊は、ギリシヤやローマの広場と同じように、公開討論の場として用いられていたようである。したがって、神殿の敷地内の廊をユダヤの国家、特にユダヤ人の指導者を非難する教義を説く「邪教」の者が占有することに対して、神殿の役人が憤りを覚えたことは容易に理解できる。

キリスト教、サマリヤ人の間に広まる

最初の大量の改宗がユダヤ人の社会で起

こったことは確かであるが、教会の普遍の真理は間もなく別のグループをも魅することとなった。民として最初に福音を受け入れたのはサマリヤ人であろう。サマリヤ人は、何十人ものイスラエル人の男子がアッシリアに捕らえられた紀元前8世紀をその起こりとする民である。イスラエルの子が連れ去られた後に入った異教の民がイスラエルの女性たちと婚姻関係を結び、次第に妻たちの宗教を信奉するようになるのだが、中にはまだバールの神に帰依する者もいた。(列王下17:24—33) 当時のユダヤ人は彼らを、背教したイスラエル人と考えていた。このサマリヤ人は、旧約聖書とユダヤ人の言い伝えの多くを受け入れていたので、異邦人ではなく退廃した宗教を信奉する民とみなされていたようである。

マタイは、十字架におかかりになる前のイエスの言葉として、異邦人やサマリヤ人に福音を説かないように使徒たちに教えたもうたことを記録している。(マタイ10:5) またイエスがサマリヤ人にバプテスマを施したもうた記録はない。しかしながらサマリヤ人の多くはイエスをメシヤとして受け入れ、十二使徒会からの召しであろうか、ピリポがサマリヤに行き、おびたしい数の改宗者を得ている。

ピリポの成功を知ったペテロとヨハネは、サマリヤに出向いて改宗者を教会員として確認するのを手伝った。(使徒8:5—8, 14—25) 教会の権威の中枢であるピリポやペテロやヨハネがためらいもなくサマリヤ人を教会員として受け入れたということは、サマリヤ人を異邦人として見ていなかったことの表われである。

ユダヤ人以外の 最初の改宗者

福音はユダヤ人の枠を越え、また背教したユダヤ人やサマリヤ人をも越えて、やがて異邦人に至る。これがあのコルネリオの胸躍る話である。またこれは主が大管長にお与えになった啓示であり、異邦人に福音をもたらすことを承認するものである。

コルネリオはローマの軍の隊長で、ユダヤ人の神に対する信仰は篤く、かつユダヤ人に対して寛大な人物であった。使徒10：1—2の記述から、彼がユダヤ教に対して関心を抱いていたことがわかる。導きを求めて祈っていたとあるのは、多分、ユダヤ

教に改宗するかどうか考えあぐねてのことであろう。この時ひとりの天使が現われ、50キロ以上も南の海の近くの町ヨッパに人をやって、ペテロという名の人物を招くように告げる。

比喩的な示現を受けて、ヨッパからの使いの招きに応じることを教えられたペテロは、ヨッパからのユダヤ人キリスト教徒に伴われて北に向かい、カイザリヤに着いた。コルネリオはペテロに天使のお告げがあったことを話し、約束されたメッセージを家の者に伝えてくれるように嘆願する。こうして聖霊の働きを目のあたりにしたペテロは、もはやキリストがユダヤ人以外の者たちにも福音の門戸を開け放たれたことを否定することができず、彼らにバプテスマを



◀サマリヤ人の多くはイエスをメシヤとして受け入れ、ピリポがサマリヤに行き、おびただしい数の改宗者を得ている。

施した。(使徒10:44—48参照)

エルサレムに戻ったペテロが、自分の見た示現について、また聖霊が異邦人の上に豊かに注がれたことについて話すと、ユダヤ人キリスト教徒は驚いてこう言った。「それでは神は、異邦人にも命にいたる悔改めをお与えになったのだ。」(使徒11:18) コルネリオの家の者たちは、キリストの教会に受け入れられた異邦人としては最初の人たちで、パウロが「異邦人への使徒」として召され、福音の門戸が世界的に開かれる口火を切ったことになる。

組織の拡大

20世紀の教会員は、聖書の時代の教会と現在の末日聖徒イエス・キリスト教会の組織が一から十まで同じであると考えてはならない。むしろ、初期の末日聖徒イエス・キリスト教会(1830—1850)と古代のイエス・キリスト教会を、組織や神権の解釈の点で比較するとよい。例えば、神権役員は今のようないままでの定員会がないままに活動していたし、今では十二使徒評議員会として行なう仕事を、各個人が割り当てを受けて行なっていた。

そのように考えれば、予言者として2度登場するアガボなる人物についてもある程度理解することができる。彼はおそらく、七十人か何かの役職にある教会員だったのだろう。しかし、ルカが何も記していないので、彼の素性や使徒との結びつきは明らかではない。同様に、ルカは当時カイザリヤに住んでいたピリポに予告をする4人の娘がいたことを記録している。(使徒21:9

ルカの記述は、
発展する教会が、
キリスト教徒と呼ばれる人々の
数を拡大しつつ、
ユダヤ人の一宗教から
次第に世界の教会へと
変わっていく様子を
私たちに伝えてくれる。

参照)しかしルカの記録は彼女たちの予言はひとつも載せていないし、どのようなことから予言をする者と言われているのかも明らかでない。ただアガボの、パウロがローマで捕らえられるという予言はまったくその通りに成就している。(使徒21:11)彼ら(彼女たち)がどういう役職を持ち、どのような機能を果たしていたか、私たちにわからない。もしかしたら、ただ単にある人はそうしたみたまの賜を受けていたということを表すだけのものなのかもしれない。

ルカの記述は、発展する教会が、キリスト教徒と呼ばれる人々の数を拡大しつつ、ユダヤ人の一宗教から次第に世界の教会へと変わっていく様子を私たちに伝えてくれる。今日と同じように、古代の教会は人間が運営していたにもかかわらず、至高者からの靈感とイエスに対する熱烈な証によって支えられていた。そして当時の聖徒たちも、私たちと同じように、その置かれた環境の中で福音の原則を実践に移すことを求められていたのであった。

約 束 と 成 就

リア・シースコーネン



私は眠っている男の子の青ざめた顔を見下ろしました。彼の濃いカールしたまつげが目元に影を落とし、漆黒の髪が幾筋か病院の白いまくらの上に広がっています。張りつめていた感情の高ぶりが静まり、私はひどく疲れを覚えました。3週間に渡る夜通しの看病は苦しみの連続でしたが、今豊かに実を結びました。緊張は和らぎ、胸の中の恐れという固いしこりが徐々に解けて行くのを感じました。少なくともその時は感謝の気持ちさえ起きませんでした。5歳になる息子が生死の瀬戸際に立っている中で、私は茫然自失の状態にありました。私は絶えず彼に気を配り、愛撫し、優しく話しかけ、私の愛情でなんとかして彼の生命を守りたいと、必死になってきたのです。

私は彼のほおに触れました。もう帰る時間になっていたのです。ドアをそっと閉めて病室を出ると、もう10時を回っていました。そして化粧室に入り白衣を脱ぎ、消毒液でかさかさした荒れた手を洗いました。病院を出る前に窓から子供の様子を伺いました。なんと清らかな寝顔でしょう。息子は最初虫垂炎と診断されて入院したのですが、検査の結果重症の胃炎に肺炎を併発していることがわかり、命取りになるかもしれないと医者に言われていたのです。

しかし愛する天のお父様の憐れみによって奇跡が起こったのです。夫は神権の祝福を息子に授けました。教会員、非教会員を問わず多くの人々が息子のためにお祈りしてくれました。医師は手を尽くして治療に当たってくれました。おかげで息子は峠を越えることができましたのです。

外は寒く、闇に閉ざされていました。気まぐれな風が粉雪を吹き上げ、辺り一面は一見なだらかに雪が積もっているのですが吹きだまりでどこが通り道か区別がつか

なくなっていました。秋は私の知らない内に冬になっていました。私の町まで行くバスは徐々にスピードを落としながら近づき、停留所に止まりました。あの子はクリスマスまでには帰ってくるわ。私は心の中でそう思いながらバスに乗りました。私たちの息子がクリスマスには帰ってくるのよ。丁度あの時のように。もうあれから5年になるのかしら……。

その年の春はまったく驚くべき事が続々と起こりました。その頃は子供がとても欲しかったので、いつかは必ず子宝に恵まれるものだと頭から信じていました。私は夫に最初は絶対男の子だと自信ありげに言っていました。しかし何人もの医師が下した診断や、結婚して10年もたっているのに子供がないことなどを考え合わせてみると、今さら子供に恵まれるなどということはあり得ないのです。

養子をもらうことも幾度か考えてみました。でも養子の手続きは複雑な過程を踏まなければなりません。養子の申請をした夫婦は何年も待たされた上に、徒労に終わることもしばしばあったと聞いていました。それにモルモンに養子を世話することに反対していた福祉機関の役人もフィンランドには何人かいたそうです。(しかしその後、モルモンの生活態度に理解を示すようになりました)

私たちの思いとはことごとく裏腹の結果が出てはいるのですが、子供が持てるというほのかな希望が、時と共に徐々に確信として私の心の中に芽生えてきました。私は明けても暮れても赤ちゃんのことを考えていたので、夫もだんだんその気になってきました。私たちはよく「私たちの」坊やについて話しました。坊やの存在は毎日に現実味を帯びてきて、ある夜夢にまで現われたのです。夢の中で私は赤ちゃんを腕にし

っかり抱き、何物かに追われ逃げていました。何度も何度も振り返りながら中庭を駆け抜け、へいによじ登ろうとすると、民族衣装を着けたジブシーが私の後から追い掛けて来るのが見えました。へいを越えると今度は川にぶつかりました。その川を渡らないとジブシーに捕まってしまう。飛び込むと水は腰の辺りまできました。流れに逆らって前に進むにつれ、水かさは増し、とうとう私の背の高さにまで達しました。私は赤ちゃんが水に沈まないよう頭の上に掲げながら浮きつ沈みつして進みました。心の中では繰り返し「私の赤ちゃん、私の赤ちゃんを守らなくちゃ」と念じ続けていました。疲れ切ってふらふらになりながらも、ついに私は赤ちゃんを守り切り、向こう岸までたどり着くことができたのです。

その年の夏、私と夫はスイスへ旅行しました。何年前かに私たちはバプテスマを受けていて、結婚の結び固めをするためにスイス神殿へ入りました。神殿の中でひとりの司式者に、子供が欲しいという私たちのたつての願いを訴え出しました。すると彼は、断食し祈って主の導きを求めるよう勧告してくれました。私たちはいつもお祈りを欠かしたことはありませんでしたが、思いの焦点だったこのこと自身については、ろくにお祈りをしてこなかったのです。

その年の夏から秋にかけて、私はこれまでに何度も受けてきた勧告についてずっと考えてきました。断食やお祈りぐらいいつもしていることなのに、どうしてためらいを感じているのか自分でもわかりませんでした。多分私は、主が答えて下さらなかったり、主の答えが私の望んでいたものと違っていたりするものが恐かったのでしょう。しかしついに私は覚悟を決めたのです。

12月11日の月曜の午後から、私は断食を始めました。次の日、私はいつものように

仕事に行きました。けれどもその日は、私にとって普通の日とは違っていたのです。それは本当に驚きでした。想像もしなかった喜びが私の心に広がりました。歩いていてもふわふわ浮かんでいるような心地なのです。あの日のように生氣にあふれた気持ちを味わったことはそれまでにありませんでした。だれ彼かまわずに愛を感じて、会う人すべてを抱き締めて回りたい気分でした。その日は「……ただ汝が断食を完からしめんため、言い換うれば汝悦びを以て充たされんため……」(教義と聖約59:13)という聖句を実感したような気がします。

私には依然として主が私に何をお望みなのかわかりませんでしたが、喜びで一杯の私の心は、「主のみむねがどうあれ、私には準備ができています」という気持ちを主に語っていました。

その素晴らしい日も終わりに近づき、家に着いた私は断食を解く時間を迎えていました。夫と共に夕食の席に着こうとした時、電話のベルが鳴りました。急いで出てみると、それは近くの町に住む末日聖徒の姉妹からでした。彼女の名前には聞き覚えがあり、何か社会事業に関する仕事をしていたことを思い出しました。彼女は、きょう電話したのは特別な理由があったからで、今から言うことをどこかに腰を落ち着けて聞くように言いました。電話のそばには椅子がなかったので、かまわないから先を続けるよう彼女に促しました。でも彼女の言う通り、私は椅子を取りに行けばよかったように思います。彼女の言葉を聞くと、私の全身の力は抜けていき、胸は速鐘のように高鳴り出したのです。彼女の言葉はこうでした。「あなたの所で男の子をひとり引き受けて下さらないでしょうか。私たちは適当なおうちを探していて、あなたのお宅が浮び上がってきたという訳なんです。その子

は実をいうと生粋のジブシーの6カ月の赤ちゃんなのです。」

自分自身でも驚いたのですが、私は落ち着き払ってこう言いました。「これはとても大切な事ですから、主人と相談して後ほど返事を差し上げますわ。」

夫との話し合いは1時間ほど続き、それから私は彼女に電話をかけ、ふたつ返事で彼女の申し出を受けました。

次の日私たち夫婦は赤ちゃんの入っている施設を訪れました。面会室に通され、園長さんが私たちの坊やを連れて戻ってくるのを待っていました。辺りは期待で水を打ったように静まり返り、時間さえ止まったように感じました。その時遠くの方から、かわいそりの鈴の音のような、優しいチリンチリン鳴る音が近づいてきました。ドアが開いて、音がいつそう大きく響いたので、それが赤ちゃんが握っているがらがらの音だとわかりました。(その時以来、私にとってそりの鈴の音はまるで天国からの調べのように感じるようになりました)

私の人生に入り込んできたこの物珍しい男の子を見て、私は目を疑いました。恐ろしく長い上向きのまつ毛に色濃く縁取られた瞳は、小さな子供の顔にはまったく似つかわしくありませんでした。深く一途で、千古の知恵をたたえているかのような瞳は私を射すくめています。

園長さんは私の腕に赤ちゃんをゆだねました。それは私と彼との最初のぎこちない接触でした。赤ちゃんを見つめながら、頭の中を様々な思いが駆け巡りました。「この子は私たちの息子なのね。私たちの赤ちゃん、私の坊や。」私はこの耳新しい感動的な言葉を心の中で反芻していました。

彼を夫に手渡すと、好奇心旺盛な赤ちゃんは夫を見上げ、あごに触ろうとあどけない腕を伸ばしました。奇跡が起こったので

す。赤ちゃんの瞳と唇にほほえみが浮かび、夫もつられて同じ微笑を浮かべました。その光景は私の胸に焼き付けられ、永遠に私の心の宝となりました。

その瞬間何かが終わりを迎え、何かが新しく始まりました。親子のまだもろい絆が結ばれたのです。いえ、この時が最初だったのではなく、この静かな面会室で、親子として実際に巡り会うずっと以前からこの絆は存在していたのです。

その日から3日間、私と夫は赤ちゃんのために家の中を整えました。私たちは精神的にも情緒的にもすでに準備はできていました。その次の日曜日の12月17日、私たちの赤ちゃんがクリスマスと一緒に迎えるためにやって来たのです……。

バスがガタンと揺れた拍子に、私ははっと我に返りました。空想に浸っていて自分がどこにいるのかも忘れてしまっていたのです。もう私の降りる停留所は過ぎてしまったのかしら。窓から暗闇に包まれた町並みを見ると、見慣れた建物の明かりが見えます。次が私の降りる停留所でした。

雪の降りしきる中家路をたどっていると、私の心は感謝の温かい気持ちで満たされました。その時、天のお父様は導きを与えて下さり、私の望みをかなえて下さったことを再確認しました。人生の葛藤の中にある時も、天のお父様は私の力の源となって下さいます。そして天父はその温かい手を差し伸べて、私たち家族を天の家にいっしょにご自分の下へと優しく導いて下さるのです。

(シースコーネン夫妻はヘルシンキ・フィンランドステーキ部ターンペレワード部の会員です。夫婦は2年間この赤ちゃんを里親として養育した後、実父母の承認を得て養子として迎え入れました)

「あなたが立ち直ったときには」

ジャネット・ブリガム



彼女は改宗して3年、自分の改宗談によって人々を励ましている時ほど幸せな時はないという、伝道を終えて間もない帰還宣教師です。伝道部長の奥さんの要望で書いたという、きれいにタイプされた彼女の改宗談を読んだ時、私は畏敬の気持ちを覚えました。また、少しうらやましくも思いました。彼女の証は、モルモン経を勉強し、福音を教え、真理に対する霊的な確認を求めていくにつれてどんどん強くなっていました。と言って彼女は天使に会ったわけではなく、ただ小さな奇跡を経験してきたのです。主により人生を揺り動かされた彼女は、今度は自分の改宗談を通して私の生活を動かしたのです。私は教会の中で育ったこともあって、改宗した人が持っている燃えるような熱意には感心してしまいます。

私は彼女に、このような経験は互いに交換すべきであると話しました。「だからお返しに何か同じように価値のあるものをあげ

なくてはいけないのだけど、何をあげたらいいのかしら。」彼女は、私の自作の詩を読ませてあげるといふ申し出を如才なく断わると（「私、詩は好きじゃないの」と彼女は言った）、「あなたの改宗談を書いてくれないかしら？」と言いました。

「でも、私、改宗者じゃないもの。」

「そんなの言い訳にはならないわ。それとも改宗してないって言うの？」

その夜、私はあやふやな気持ちになりました。彼女の改宗談を読み返してみても、集会に出席し、日曜学校のレッスンを教えてきた自分のこれまでの生活から改宗談をまとめることは、とてもできそうにないように思えたのです。私の改宗はいつ、どのようにしてというはっきりしたものではありませんでしたが、改宗を知る資料は確かに手近にありました。私はずっと日記をつけていたのです。ともかく私にも改宗談はあるんだわ。日記をざっと見返してみると、自分がいつでも教会というものを意識して

いたことがわかりました。私の先祖は教会が回復された初期の時代、イングランドとニューイングランドでバプテスマを受け、後に平原を横断してユタに移住してきたのです。私は自分がモルモン教徒であることを一度だって忘れたことはありません。

私はまず、「自分がモルモン教徒であることをいつも心に留めている」ことから書くことにしました。教会で育ったこと、コーンフィールド（とうもろこしを食べるパーティー）や初等協会に行ったこと、ソロで歌い、学校の友達に教会について話したことを書きました。私の祖母は私が8歳の時に亡くなりましたが、幼いながらも死というもの理解していたので、だれから説明を受ける必要もありませんでした。アイダホ州レックスバーグの第4ワード部の礼拝堂で行なわれた祖母の告別式には、親類全員と町の半分の人々が集まってくれました。

こうして思い出を綴っていると、ひとつのテーマが浮かび上がってきました。子供の頃、私は福音を実践によって学んでいたのです。家族や教師から、私は主に頼ることを教わりました。私は子供の時から祈りをささげてきました。ところが、これが皮肉というか、青春期を通じて、私は自分の祈りが正しく効力のあるものであるかどうかを疑っていました。他の人々が劇的な祈りの答えや長い時間、主に祈ることを話すのを耳にしてそう思ったのです。それとは対照的に、私の祈りは率直で短く、時にはまったくのお願いだけという要を得た祈りだったからです。でも私は日記を振り返り、記憶をたどって見た時に、自分がいつも祈ってきたこと、またその祈りはいつも心からのものであったことがわかりました。祖母が亡くなった時や、馬に乗っていて御し

切れなくなった時、だれも私と踊ってくれ
る人がいないのではないかと不安だった時、
恐くて人前でピアノ独奏をすることができ
なかった時、私は祈りました。どの祈りも
すぐには答えられませんでしたでしたが、時がた
つにつれてすべて答えられました。

私は主に頼ることが、小さい子供の頃から自分の生活の一部となっていることに気づきました。そして、それまで疑問に思っていたことがわかったのです。私の人生に主のみ手があったことが初めてわかったのです。

高校時代、教会の活動に熱心に参加したことを書いているうちに、私は友人たちの多くが、私の生活が彼らと違うのはなぜなのか知りたかと言っていたことを思い出しました。なぜ私が教会でそんなに多くの時間を過ごすのか、なぜモルモンの子供たちはそんなに親しいのか、早朝6時半からの宗教講座では何をしているのか、など。私は何人かの友人に福音について話しました。ひとりの女友達と彼女の家族は、学校の演奏旅行から帰ってきたある日、台所のテーブルを囲んでいた時に、私が恐る恐る「モルモン教会について何か御存じですか」と尋ねたことがきっかけで、数週間後にバプテスマを受けました。もうひとりの友達はモルモン経に対する証は得ましたが、15歳でバプテスマを受けるまでの信仰がありませんでした。その他の友達も、若い女性の集会や教会のダンスパーティーと一緒に行ってくれました。また、高校のジャーナリズム大会で知り合ったひとりの青年は、3年間文通した後、教会に入りました。私が彼を改宗したわけではありません。私が真理を紹介し、彼がその真理を認めたのです。

日記に書かれていたこれらの出来事を振

り返り、改宗談としてまとめてみるまで、私は自分が役に立つ「会員宣教師」になれるのかいぶかしく思っていました。そして、「すべての会員は宣教師である」という言葉が何年も、罪を告げるように耳に残っていました。でもその時、私は私なりに、私の友人たちにとって宣教師であったということがわかったのです。それがわかったことで、今私は自信を持って引き続き喜んで、率直に福音を伝えています。

次に私は、主の僕を通して主の助けを求めた時のことを書きました。特に自分を「すべての人の僕」（教義と聖約50：26）と考えている立派な人々を知るといふ祝福について、私が心から尊敬しているひとりの監督のことを書きました。私は彼らも、彼らの指導力も忘れていたのです。主のみ言葉が自分のものとなるまで聖典を勉強するようにと最初に動機づけてくれたのが、彼らであることを忘れていたのです。

ブリガム・ヤング大学に在学中のある朝、私は自分の人生に目的があることを知らなければならぬという気持ちにかられました。ちょうどその朝は礼拝集会で十二使徒のひとりが話をしてくれることになっていたのです。私はその話から導きときっかけを得られるようにと祈りました。私の祈りはわずか数時間後にはっきりと答えられました。この出来事もまたしばらく忘れていたことでした。

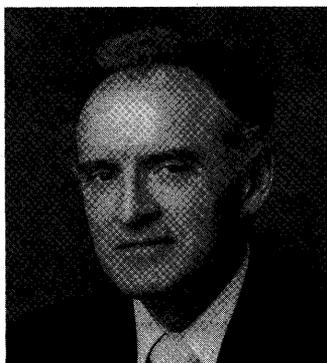
これらの出来事から、主が私の生活にかかわっていて下さったことがよくわかります。しかし不思議なことに、信仰を固く守って生活するという自分の能力については低く評価していたのです。全部で8ページにわたる改宗談を書くことを通じて、私は自分の良さを一層感じました。また日記を

読み、改宗談を書くことによって、私は自分という人間をさらによく理解し、自分の成長をよりはっきりと確かめることもできたのです。またすべての福音の原則を理解し、あるいは受け入れていない時でも、主は受け入れていたことがわかりました。私はこう書きました。「私は子供の時に、祖母や母、教会のたくさんの教師から教えられて、祈ることを学びました。ですから祈りに対して信仰を持っていました。それで疑問を持った時期も切り抜けてこられたのだと思います。いざという困った時に思い出したのは、まだ幼い子供の頃の祈りです。」

自分自身の教会歴史でもある改宗談を書いてから一層良いことがありました。ルカは「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカ22：32）と書いています。私は書き終えた改宗談を、私に初めて改宗談を読ませてくれた友人に渡しました。（それを読んで彼女は、「とても素晴らしいじゃない。自分にも改宗談が書けるとは思わなかったでしょう」と言ってくれた）以来、私は慎重に判断しながら何人かの友人に私の改宗談を読んでもらいました。そしてお互いの経験を分かち合い、励まし合ってきました。私はまた、福音をもっと知りたいという教会員でない友人たちにも私の改宗談を見せています。ただその多くはとてもプライベートなことなので、だれにでも見せるという訳ではありません。私が改宗談を分かち合った友人たちは強められ、それによってまた私も力づけられています。こうして改宗談を書き、名前と日付を記したことで、私は励まし以上のものを得ました。私も改宗者なのです。



主は
すぐそばに
おられ
いつでも
助けて下さる



七十人第一定員会会員
テディー・E・ブルーアートン

「わたしは独りぼっちだ」などと考える人は、だれひとりいないはずで
す。そうではないことを証明する手段方法には事欠きません。文字通り、生ける神の息子、娘である私たちには、天父が私たちを愛していて下さり、いつでも手を差し伸べようとして下さっていることを知る権利があります。またこのように考えてみると、天父には私たちの行く末を見通すことができること、私たちよりも私たちが必要としているものについて知っておられること、そして、御自身の知恵によって助けの手を差し伸べられることに気づかざるを得ません。主に頼るといことは、何を置いても必要なことなのです。

予言者ジョセフ・スミスに与えられた近代の啓示の中で、主は次のような温かい誘いの言葉を発しておられます。「……われ近きにある間に汝らわれを呼べ……われに近づけ、さらばわれ汝らに近づかん。熱心にわれを求めよ。さらば、汝らわれを見出さん。求めよ、さらば与えられ、叩けよ、さらば開かるることを得ん。」(教義と聖約88:62—63)

私が中南米のある伝道部を管轄していた時に、ある長老が経験した美しい出来事についてお話したいと思います。それは、主が私たちのすぐそばにおられ、必要な時には喜んで助けて下さることを教えてくれるお話です。この長老は、普通の19歳の宣教師よりは少し年上でした。彼は改宗者で、兵役を解除になり、その後伝道の準備をしたのです。彼は召しを受け、ソルトレーク・シティーの宣教師宿舎に入りました。宣教師宿舎にいる間、彼はこう自問したのです。「ぼくには証があった。しかし、今はどこにあるのだろう。自分のお金で伝道するの

だとすれば、ジョセフ・スミスが事実、本当に神の予言者であったのかどうか、ぼくは知らないわけにはいかない。」

その夜、彼は自分の部屋にひざまずき、予言者ジョセフ・スミスについて考えていることを、天父に話しました。彼は落胆しました。何ひとつ確信めいた経験はできなかったのです。そしてそのまま翌日を迎え、集会へと向かいました。その日は、教会幹部が話をする日でした。うつうつとした気分のまま、彼は後ろの方に座を占めました。会場には、305名の宣教師が出席していました。N・エルドン・タナー副管長が部屋に入って来た時、その長老は心の中にこう思いました。「なあんだ、当世風の結構な身なりをした実業家と言ったところだなあ。とり立てて予言者というふうでもないじゃないか。」

ゆううつな気分だったその長老は、タナー副管長が話を始めても、聴こうという気持ちはまったくありませんでした。しかし数分たつうちに、彼はだんだんに話に引き込まれていくようになりました。すると突然、タナー副管長はこう言いました。「24歳の宣教師の方、お立ち下さい。」さて読者の皆さん、一体何人の宣教師が立ち上がったとお思いでしょうか。たったひとり、この長老だけだったのです。タナー長老は彼に前へ出てくるようにと言いました。彼はしぶしぶ出て行きました。

彼はタナー副管長の方に向かって歩いて行く途中で、前の晩に求め続けた予言者の召しの神聖さについて、証を得たのです。その時、タナー副管長は彼に、ジョセフ・スミスの召しが神よりのものであるという証をするようにと言いました。彼は自分自身の証を述べ、ジョセフが神から召された

こと、そして真の予言者であることを皆の前で話しました。

生ける神がおられます。神は私たちを愛して下さり、いつもすぐそばにいて、助けて下さいます。生涯どのような時も、疑う必要はありません。神の戒めに従って生活している会員であれば、だれでも神の力を

タナー副管長はこう言いました。

「24歳の宣教師の方、

お立ち下さい。」

さて読者の皆さん、

一体何人の宣教師が

立ち上がったとお思いでしょうか。

感じるすることができます。また、教会員でなくても、みこころならば確かに感じるができるのです。それは次に紹介するサンパウロ神殿での出来事からも明らかです。

サンパウロ神殿は献堂式の準備のために閉じられる前、1978年9月の間、一般の人人に公開されました。この特別な神殿から言いようのない気持ちを感じた人々は大勢いましたが、その中にひとり、非教会員の新聞記者がいました。

見学の最後に、彼は日の栄の部屋の入口にさしかかりました。彼と一緒にいた人々の言葉によれば、彼は急に立ち止まって、頭を垂れたのだそうです。彼は、しばらくの間、その場に立ち尽くしていました。目を閉じ、頭は垂れたままでした。それから彼はゆっくりと頭を巡らして、同時に眼を

開けました。まるで「どなたがいらっしゃるのですか」「どなたかおられるのでしょうか」というような素振りでした。

またしばらくして、彼は頭をしゃんと上げ、眼を見開きました。その動向から、そこが聖い場所であると彼が悟ったことが見てとれました。その頬には、涙がつつっていました。彼は神殿の中で度々感じられる、あの素晴らしいみたまの力を感じたのです。そして、そこには何か善いものがあることを悟り、心に喜びを感じたのです。それは本当に、確かに感じることでできるものです。

さて、私たちは若いうちに、多くのことを決意し、目標を設定しなければなりません。天父に頼ることを学んで下さい。天父は、何であれ私たちが本当に必要としているものであれば、与えて下さいます。ただ天父に信仰を持ち、信頼を寄せさえすればよいのです。天父は私たちを導きたまい、例えば伝道の召しを果たす、もっと努力する、主の方法ですなわち神殿で結婚するなどの目標を達成しようとする時、助けを与えて下さいます。このような目標を達成したからと言って、さらに高い目標に向かって前進するごとをやめてしまってはいけません。私たちを豊かに愛して下さる天父にいつも近くあり、天父のために働かなければならないのです。

もうおわかりのように、天父は私たちに幸福になってほしいと望んでおられます。天父の助言に信頼し、みこころに従順になり、でき得る限り幸福になってほしいと望んでおられるのです。私は、神が生きておられることを知っています。神は私たち一人一人を思いやり、いつも私たちのそばにいて私たちを助けようとしておられるのです。

ラジオの真空管

私の家にはラジオという素晴らしい器機があります。装置がすべて順調に作動してくれる時には、ダイヤルを合わせさえすれば、大陸の彼方からでも、時には外国からでも話し手や歌手の声を、居ながらにしてあたかもその場にいるかのごとくに聴くことができます。しかし、長いこと使っていると、このラジオという器機に内蔵されている小さくてデリケートな部品や真空管内の装置がいたんできます。十分に適切な注意を払ってやらないと、見かけは異常がなくても、中では何か不都合なことが起こっているかも知れません。そうになると、聞こえなくなるのです。歌手の歌も、話し手の話も聞こえません。

ところで、あなたも私も、心の中にラジオの真空管のようなものを持っているのです。「聖餐会へ行く」という真空管、「知恵の言葉を守る」「什分の一を納める」「家族の祈りをする」「聖典を読む」「純潔を保つ」など。もしこの中の一本でもいたんで使用不能になったり、作動しなくなったりすると、つまり神の戒めを守ることができなくなると、ちょうどラジオのいたんだ真空管では、はるか彼方からの声を受信することができないのと同じように、霊的なものを受けることができなくなるのです。

「……神の戒めを守るなら、私たちは天父から答えを得、進むべき方向を知り、導きを受けることができます。」(ハロルド・B・リー『ラジオの真空管』New Era「ニュー・エラ」1973年3月号、pp.10-11)

召しを受ける前に

デビッド・R・マイケル

専任宣教師になるための
準備について、
伝道部長のアドバイス



新任の長老や姉妹が到着すると、伝道本部の周りには、うきうきした気分が漂います。新参者は意欲に燃えているので、本部のスタッフも、専任宣教師としての伝道生活に早く慣れてもらおうと、一生懸命になるのです。伝道部長も、新任の宣教師たちに主に仕えるという報いに満ちた経験を十分にしてもらおうと、心を砕きます。

伝道部長はまず一人一人と面接して、だれが新しい召しに感激して興奮しているか、まただれが心配しているか、おじけてしまっているか、誇りに思っているかなどを、さっと見抜いてしまいます。それに、その時その宣教師がどんな心情でいるにせよ、自分の召しを最もよく果たすにはどうしたらよいかについては興味津々でいることも。新任宣教師は成長し、学び、ほとんど全員が首尾よく伝道生活を送り、良い成果を得ていきます。

しかし、少数ではありますが、伝道生活に入った時にはもう十分な準備ができている人もいます。そのような人、とてもよく成果を上げる宣教師について、伝道部長の意見を聞いてみたらどうでしょう。伝道部長は、どんな意見を述べて下さるでしょうか。

世界の方で働かれた現職、またはすでに解任された5人の伝道部長から意見を求めたところ、上手に伝道をした宣教師、そして非常な好結果を得た宣教師は、ほとんど皆、ユタ州ソルトレーク・シティーの教会本部から召しの手紙を受け取るずっと前から準備を始めていたとのことでした。私も編集部ではニューヨーク州ニューヨーク・シティー伝道部のロランド・R・ライト伝道部長、ウルグアイのモンテビデオ伝道部のマリオン・C・ロビンソン伝道部長、英国ロンドン伝道部のベン・E・ルイス伝

道部長、カリフォルニア州オークランド伝道部のリンゼイ・R・カーチス伝道部長、そしてフランスのパリ伝道部のR・ディーン・ロビンソン伝道部長からお話を伺い、その内容をまとめてみました。この記事が、これから「神の役務に出で立たんとする」皆さんのお役に立てばと念じている次第です。

専任宣教師になろうとする若い人が伸ばしておかなければならない人格的特質には、どのようなものがありますか？

ルイス伝道部長 まず、隣人に仕えたいという望みを持っていないければなりません。また、物事に対する楽観的な態度、精神的な満足感、それに他人の失敗や欠点よりもむしろ良い面に目を向けられるといった特質も必要です。主の戒めに従順であること、規則を破ったりしないことも大切です。それから、救い主への揺るぎない証を持ち、時間をかけて聖典に書かれていることを学び、その知識を得ておかなければなりません。

ディーン・ロビンソン伝道部長 主に信仰を持っている優秀な宣教師たちは、目標を作り、それに向かって努力します。彼らはまったく文字通り「天の能力」と一体なのです。それに、同僚と心を合わせるようにし、口論を避けます。また、天父と語ることが好きです。そして昼日中でもたびたび祈りを捧げます。

優れた宣教師たちは、ホームシックをどのように克服しているのでしょうか？

ルイス伝道部長 彼らは、その方法を知っているのです。大学時代には、「かなり広範囲」から集まってくる学生たちと交わり、異文化や異人種と接しますからね。だからと言って、主のみ業に仕えるにふさわしい人が伝道活動を捨てて大学だけを選ぶのは良くありませんが。

——ふさわしい生活が欠くことのできない条件であることについては、5名の伝道部長とも、口をそろえておっしゃいます。

ルイス伝道部長 宣教師たちは、伝道に出る以前から正しい生活をしていなければなりません。自分自身をコントロールする術を知っていなければならないのです。それに、言葉遣いや癖は攻撃的になりますよ。

他にはどのような準備をしたらよいでしょうか。

ディーン・ロビンソン伝道部長 従順、犠牲、一生懸命に働くこと、祈り、信仰の5つは、宣教師が身に付けなければならない基本的な原則です。信仰は不可能を可能にし、閉ざされた心を開きます。「信仰によって歩」むことを理解し、自分のものにしなければ、伝道の成果を上げることはできません。

カーチス伝道部長 宣教師は、伝道が大変な重労働であることを認識しなければなりません。宣教師は、教える経験をして初めて、みたまの何たるかを知るのです。若い宣教師たちの中には、教えるという経験をやるまではまったく証がなかったのに、必要に迫られて小さな証を得、そこから証を強めていった人もいます。

——マリオン・ロビンソン伝道部長は、聖典の知識と、聖典研究の方法を知っていなければならないとおっしゃいました。それ



には、ルイス伝道部長もうなずいて、こうおっしゃいました。

ルイス伝道部長 モルモン経を読んで、書かれていることを試してみるのです。まずよく勉強して、すらすら読めるように、書けるように、つづりも間違えないようにならなければいけません。そして、聖霊の何たるかを、どう作用したもうかを、またどうしたら霊的な証が得られるかを知って下さい。伝道に出て証を述べられるようになるための最もよい方法は、今から、機会を捕らえては証をするようにすることです。これから伝道に出ようと考えている人は、今から決心して、実行して下さい。

——カーチス伝道部長は、今伝道の準備をしている人たちに、体力的にも情緒的にも準備をするようにとおっしゃっています。

カーチス伝道部長 肥満体の人は、伝道前に正常体重にまで減量して下さい。そして、正しい礼儀作法を身に付け、外見、身じまい、服の着こなしに気をつけて下さい。それに情緒的な面に問題がある人は、家を離れる前に治しておかなければなりませんね。
——宣教師にとって非常に大切な資質について、ライト伝道部長は、こう付け加えて下さいました。

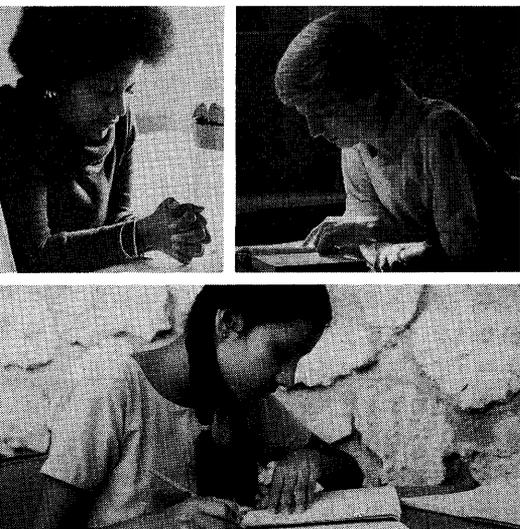
ライト伝道部長 正しい生活、自己鍛練、だれに対しても、特に監督やステーキ部長に対して正直であること、それはとても大切なことです。まれなことではありますが、監督に罪を告白せず、十分に清くないまま、悔い改めていない罪を背負って伝道に出る人がいます。そのような重荷を背負っている人は、みたまに従うことも、証をすることも、自分自身によい思いを持つこともできません。そのような人にとって伝道は辛い経験の連続ではないでしょうか。

伝道資金については、どのようにお考えでしょうか。

カーチス伝道部長 ひとつ提案したいのですが、息子さんや娘さんが家を離れる前に、御両親は息子さん、または娘さんと腰をすえて伝道資金について話し合い、伝道資金をどう使うかについてははっきりした方針を立て、親子共々了解しておくようにしてはいかがでしょうか。毎月いくら位のお金がかかるか、送金のための方法などについては、伝道管理部からの手紙に書かれています。
ルイス伝道部長 自分の伝道資金は最大限自分で出すことができるように、今から働いて、貯金するようにするとよいでしょう。自分で稼いだお金で伝道するならば、伝道はずっと有意義なものになるでしょうね。

どのようにすれば、親子が協力し合って伝道の準備ができるでしょうか。また、親や友人は、どのようにしたら伝道中の宣教師を励ますことができますか？

ライト伝道部長 親はもう少し力を注いで子供に「自分は信頼されているのだ」という気持ちを感じさせるようにするとよいと思います。幼い頃から始めて下さい。生活上のいろいろな習慣について話してやったり、正しい生活をするによってもたらされる素晴らしい祝福についても話してやったりして下さい。ちょっと気づいたことなのですが、親御さんたちは子供の教育を神権指導者に任せきりで、自分では子供に何も話してやらないというケースが多いように思います。



ディーン・ロビンソン伝道部長 親は皆、まず、よい宣教師になるにはどうしたらよいのか自分が理解して、子供にそのように教えるのとよいと思います。そして、いつも教え、励まし、自分の模範に従わせるのです。

カーチス伝道部長 そして、同僚や指導者を支持するように教えて下さい。会員たちと仲良くなるように教えて下さい。伝道中の息子さんや娘さんが同僚とうまくやっっていけないことを手紙に書いてよこしたら、同情したり叱ったりせずに、自分自身の欠点弱点を振り返ってみるように書いてあげて下さい。そして、お互いの関係がよくなるような方法を教えてあげてほしいのです。

ルイス伝道部長 息子さんや娘さんに途中で伝道をやめてほしくなかったら、「家に帰ってこさせる」ようなことをせず、(手紙を書くなど)あらゆる手段を使って、「伝道を続ける」ようにさせて下さい。

マリオン・ロビンソン伝道部長 手紙を書く時には、宣教師であることを認識させる

ために『○○長老』とか『○○姉妹』とかいうように書いて下さい。また、私が親だったら、週に一度以上は書きません。でも、毎週毎週書きます。どうか家族が愛し合い協力し合うようにして下さい。家族の状態は言葉の端々に、また行間に現われるものです。宣教師たちは自分の家族がどんな状態にあるか、知っておく必要があると思います。しかし、家族の問題を詳しく全部書くべきではありません。宣教師にとって、家族の励ましほど助けになるものはありません。

カーチス伝道部長 家のことをくどくど書く位なら、息子さんや娘さんが今どんな生活をしているのか、宣教師プログラムや求道者のこと、伝道生活のことを尋ねてあげて下さい。釣りのこと、狩猟のこと、その他家族ですることの計画について書けば、息子さんや娘さんは家が恋しくなります。それよりも、教会であったこと、集会で聞いた良い言葉、より成果の上がる伝道の方法などを書いてあげるとよいと思います。それから、特別の場合(緊急事態、または伝道部長の許可がある場合)を除いて、伝道中の息子さんや娘さんに電話をしたり、訪問したりはしないでいただきたいと思います。また、普通の場合は、息子さんや娘さんが解任されて家へ帰る時も、親御さんと一緒に旅行をしたりせずに、真直ぐ帰宅するようにしてほしいと思います。

すべての準備が整い、伝道地に到着したら、伝道の成果を上げるためにどのようなことをしたらよいですか？

ディーン・ロビンソン伝道部長 規則によ

く従うことです。何もせず、ぶらぶらしてはいけません。いつも自分のことばかり考えたくなくなるという誘惑から逃れるようにするとよいですね。

ルイス伝道部長 家や恋人が恋しくなると、すぐに伝道意欲がなくなります。他人をこきおろしたり、あら捜しをしてもそうなります。宣教師は喜んで犠牲を捧げる人でなければなりません。

ライト伝道部長 私の知っているある長老は、ある目標を決めて毎日それをしました。ですから、伝道が終わった時には、自分のしたことを何ひとつ後悔しなかったそうです。それは彼にとって比較的易しいことではありましたが、彼は本当に傑出した宣教師になりました。

伝道中の宣教師に対して、彼または彼女のガールフレンドやボーイフレンドはどんな助けができますか？

カーチス伝道部長 良い影響を及ぼす場合と、悪い影響を及ぼす場合がありますね。もしガールフレンドが恋しさの余り自分の気持ちばかりを書いたりせず、彼の心の支えになるような手紙を書けば、彼は主のみ業に心を集中させることができ、彼女は良い影響を与えることができます。しかし、余り度々手紙を書いたり、情愛を示したりすると、彼は気が散って伝道どころではなくなってしまいます。余り何度も「あなたがいないと寂しいわ、寂しいわ」と書き送ることは、彼にとっては助けにも何にもなりません。それよりも、彼が伝道していることを誇りに思っていることを書いてあげたり、彼の求道者、バプテスマ数、同僚、

伝道プログラムに関心を持っていることを示したりする方がはるかに助けになります。**マリオン・ロビンソン伝道部長** 時として宣教師は、主のみ業に自分自身をすべて捧げられるか否か、全身全霊を主のみ業のために集中できるか否かを試されます。故郷に残してきているガールフレンドやボーイフレンドのことをいつも心配しているとしたら、主のみ業にすべてを捧げることは容易ではないでしょう。

——ライト伝道部長は新任の宣教師が伝道本部に到着すると、キンポール大管長の言葉を読んでもらうそうです。

ライト伝道部長 「心に鍵をかけなさい」宣教師は己れの心を（情愛すら）伝道に向けなければ、概して霊的な成長の能力をそがれてしまいます。故郷の恋人のことばかり考えながら伝道に心を向けようとしても、それはちょっと難しいでしょうね。

——5人の伝道部長の一致した意見ですが、故郷に待っている人がいようとまいと、



宣教師たちは手紙を書く習慣を身につけていかなければなりません。宣教師は毎週家族に手紙を書きます。時には、友達にも書きます。伝道が終われば、デートの時間はあり余るほどあるのです。ですから、伝道期間中は白昼に空想にふけったり、故郷の人々に自分の赴任している土地へと思いを馳せさせるような品物を買って送ったりしないようにしなければなりません。

将来伝道に出るべきかどうか迷っている若い女性に、何か助言がありましたらお願いします。

ライト伝道部長 まず自分自身の生活を整え、真の福音に対する霊的な証を得るようにして下さい。そして、福音を理解し、自らの生活に訪れる聖霊の強い力を知れば、聖霊の導きを得、専任宣教師として若干の時間を捧げるべきか否かについて確信を持つことができるでしょう。

ルイス伝道部長 予言者は、すべての教会員は宣教師であると言われました。ですから女性であっても伝道の準備はするべきだと思うのです。しかし、もしその機会が訪れず、その代わりに結婚の機会が訪れ、神殿で結婚できるならば、結婚を自らの使命と考えるべきではないでしょうか。福音を宣べ伝えるという仕事は、ずっと後になって夫婦一緒に行なうチャンスが訪れるでしょう。

知っておいていただきたいのですが、若い女性にとって、伝道のために準備することなどは、結婚のために準備することなのです。それに、宣教師としての仕事から学ぶことはすべて、結婚に役立つのです。どうか物事を霊的な面からよく考え、

主の戒めを守り、神殿結婚にも伝道にもふさわしくなれるように努力して下さい。そのためには道徳的に清い生活をし、貞節を失うような行ないは、いかなることであってもしてはいけません。

また、(これは女性ばかりでなく伝道に出ようと考えているすべての人について言えることですが) 伝道に出るということ、何かから、またはだれかから逃避することだと思わないでいただきたいのです。伝道は大変な仕事です。決して生易しいものではありません。準備もせずに出たとしたら、大変な苦勞をすることになります。ですから、聖典をよく勉強し、救い主、予言者ジョセフ・スミス、そして私たちの現在の予言者に対して自分自身の証を持って下さい。そうすれば、主は伝道の召しを受けるべきか否かを教えて下さるでしょう。

その他一般的なことで、伝道の準備について教会の若人に注意したいこと、勧告したいことなどがありましたらお願い致します。

マリオン・ロビンソン伝道部長 私は己の全身全霊、全勢力を傾けて、伝道の召しを受けるよう教会の若人に訴えたいと思います。監督とよく話し合い、予言者の勧告に従い、戒めを守り、導きを求めて主に祈って下さい。そうすれば、召しが来た時には、霊的に、道徳的に、知的に、体力的に、そして資金の面でも十分に準備ができていくことでしょう。伝道プログラムは、今日この地上であらゆる面において若い人々の指導性を伸ばす最も優れたプログラムです。特に教会における指導性に関してはそうです。それに結婚生活においても。福音を宣

べ伝えること、隣人に仕えることを通して得られる祝福、それは人が得ることのできる最も素晴らしいものです。

カーチス伝道部長 第一に、はっきり伝道のためにと目標を定めて準備してほしいと思います。そして第二に、はっきり申し上げますが、伝道は大変な重労働だということです。喜びも多いかわりに、悲しみや落胆もあります。非常に心高められる思いをすることもあれば、精神のどん底に突き落とされるようなこともあるのです。しかし何よりも大切なことは、良い宣教師になりたい、主のみ業にすべてを捧げたいという望み、その態度です。そして、もうひとつ言いたいことがあります。これは最も大切なことですが、宣教師はすべての規則に従うように教えられます。すべての規則に従う時にこそ、宣教師はみたまを受け、例外もあるにはありますが、大抵は大きな成果を上げることができるのです。

ルイス伝道部長 戒めを守り、教会に出席し、毎年セミナーに参加し、祈り、聖典特にモルモン経を勉強してほしいですね。教会の中で生活するようにすれば、外の世界に触れることもなく、墮落したような気持ちになることもありません。宣教師になるうという人は、正しい立派な生活をし、特に純潔を守り、どんなことであっても「やってみたいな、後で悔い改めればいいや」というような考えは持たないことです。それから、日記をつけることを習慣にして下さい。また、スピーチのクラスに出席して、自信をもって福音を語る技術を身につけて下さい。毎日でも毎週でもかまいませんが、たとえ短い話でも話すように心がけると、だんだんに話す技術が身についてきます。そうそう、それから、伝道の準備をしてい

る人には、伝道中の宣教師に手紙を書くように勧めたいですね。それが伝道中の宣教師とつながりを持ち、情報を得る一番手取り早い方法です。

栄養、摂取すべき食品、すべきでない食品などについても学ばなければなりません。料理の基本や裁縫もです。知恵の言葉を守り、定期的に運動をし、ほどよい睡眠をとり、体力を維持していかなければいけません。もしスポーツに興味を持っているのなら、そのスポーツに参加したり、必要な練習をしたりするとよいですね。」

ライト伝道部長 現代のティーンエイジャーには、人生設計がいかにか大切かわかってほしいと思いますね。自分の選択に後悔しないようにね。専任宣教師として働くことは、是非とも人生設計の中に入れてほしいと思います。

ディーン・ロビンソン伝道部長 教会の若人には、会員であるということが、そして福音のすべての祝福を受けられるということがどれほど大きな祝福なのか、わかってほしいですね。彼らは、すべての国民の中に主の王国を打ち建てる助けをするために選ばれたのですから。彼らには、主が任せられたもうたこの重責を忠実に果たすという大きな責任があるのです。主は私たちが必要としておられます。そして、私たちが生活を整え、いつでも主の命令を受けられるようになる時を待っておられます。主はこの忠実なる世代が奮起し、神の武具で身を固めるのを待っておられるのです。若い人々は己が身にこの責任を悟り、チャレンジに応えるよう準備しなければなりません。



もう3年も前のことです。「ボブ・ガンサー」という名前はセミナリーの名簿に載ってはいましたが、ボブ・ガンサーなる人物は、まだ一度も教会の集会に姿を見せたことはありませんでした。

ボブ・ガンサーというのは、一体だれなのでしょう。カリフォルニア州サン・ロレンゾのワード部のセミナリーの生徒たちは知っていました。ここ数年というもの、生徒たちは冗談半分にボブ・ガンサーという名前を名簿に載せ続けたのです。それがどうでしょう。今では、この冗談が「ボブ・ガンサー談」とまで言われるようになって

しまったとは。

ある月曜日の朝早く、ニール・ジェアキーという16歳の少年が通学路を歩いていました。ニールにとって、この日は普通の日とちょっと違った日でした。ニールには思いも及ばないことでしたが、この日を限りにニールの生活は一変してしまったのです。ニールは朝早く出かけて行って、キム・スピアーという末日聖徒の少女に会いました。

学校に着くと、キムは他の末日聖徒の女の子たちと図書館で勉強していました。ニールは彼女たちに、なぜいつもこんなに早く学校へ来るのかと聞きました。すると、彼女たちはセミナリーのことを話してくれました。話の途中で、突然女の子たちが言いました。「ねえ、ニールをボブ・ガンサーってことにしない？」

ニールは何が何だかわからずに突っ立っていました。「何だって？」すると女の子たちは、ここ数年間セミナリーに登録されてはいるけれども、だれも会ったことのないボブ・ガンサーという人になってほしいのだと説明しました。それでどうすればいいのかひとつつつ聞いていくうちに、ニールは結局セミナリーに出席しなければならぬことになり、とうとうこ

ボブ・ガンサー

ポール・D・キャンション

の冗談に一役買うことになってしまいました。しかし、時間がたつにつれて、本当にこんなことをしていいものだろうかという考えが起こってきました。

午後になると、セミナーのクラスのキムとマーリーンから電話がかかってきて、教会の本を何冊か持って行くから、ボブ・ガンサーになったつもりで読んでちょうだいという注文でした。ああいいよ、とニールは答えました。すると早速5時半にキムとマーリーンが家にやってきて、6冊ほどのパンフレットと、「モルモン経」と「教義と聖約」と「福音の基礎」それに教会歴史の中の1巻をニールの腕に押しつけました。ニールは開いた口がふさがらないと言った様子で、言いました。「まいったなあ、ぼくまだこれから宿題をやらなくちゃならないんだぜ。」

その夜、ニールは猛スピードで宿題をやっつけました。とその時、ふとある考えが頭をよぎりました。「明日セミナーに出席するとすれば、先生はぼくがセミナーなんか全然やった経験がないのを感じくだろうなあ。とすれば、この山のような本にざっと位目を通しておかなければ。」ニールは急いで公立図書館へ行き、図書カードを買って「ロバート・ニール・ガンサー」という名前を記入しました。そしてその夜はずっと、でき得る限りモルモンの文献を研究したのでした。しかし、短い時間に頭につめこむには余りにもたくさんの事柄がありすぎて、ニールはもうお手あげでした。

火曜日の早朝、キムが車でニールをセミナーに誘いにきました。大勢の生徒たちがニールのことを知っていました。キムは先生が来るまでの間に、ボブ・ガンサーになりますにはどうすればよいのか、ありとあらゆる方法を説明してくれました。とうとう、ニールはセミナーの教師のマイ

ク・ダニエルソン兄弟に紹介されました。しかし、どうしたことかダニエルソン兄弟はニールがボブ・ガンサーだとはまったく信じようとしなかったのです。彼が図書カードを見せた時には、吹き出してしまったほどでした。

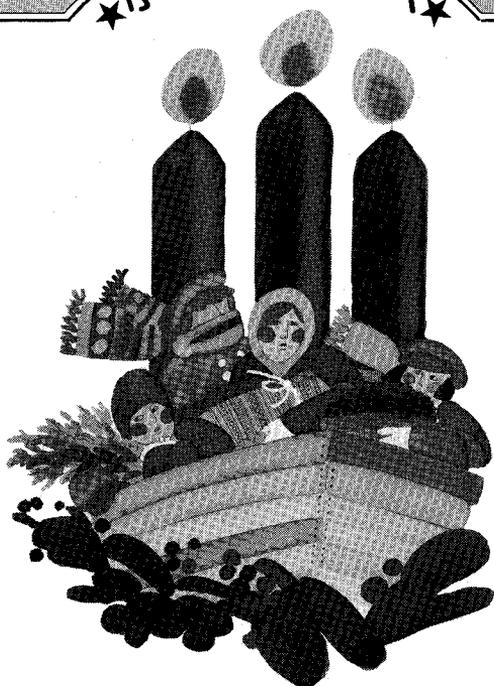
でも、冗談がクライマックスを過ぎると、ニールはもうほかの生徒たちとまったく変わらない存在でした。その日のレッスンは旧約聖書のダニエル書からでしたが、それが真底からニールの興味をかき立ててしまったのです。物語は、ネブカデネザル王の命によって、シャデラク、メシャク、アベデネゴが火の燃える炉の中に投げ込まれる所で終わってしまいました。ダニエルソン兄弟は、シャデラク、メシャク、アベデネゴがその後どうなったかを翌日のレッスンで話すと言いました。ニールは、その続きが聞きたいばかりに、次の日も来ることにしました。

水曜日の早朝、ニールは自分でも決心し公言していた通り、セミナーにやって来ました。そしてそれからというもの、毎朝集うようになりました。それから間もなく、宣教師が家に行くから話を聞いてみないか、と誘われました。ニールは承諾し、ある金曜日にふたりの長老たちから初めてのレッスンを受けました。そして約2週間後、ニールはバプテスマを受け、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員に確認されたのでした。

今では、ニールは活発な祭司で、カリフォルニア州サン・ロレンゾ第2ワード部の強力な会員です。

セミナーの生徒たちが仕掛けた面白半分の冗談が、ひとりの青年を救い主の真の教会へ導く結果になりました。実在しない「ボブ・ガンサー」なる人物は、素晴らしい宣教師の役割りを演じてくれたのでした。

★小さなお友だちへ★



エイラのぼうせく

マージョリー・アール・シェーファー

12^{がつ}月の土^どよう日^びの夜^よ明^あけです。
お父^{とう}さんとお田^{かあ}さんと妹^{いもうと}のエイラとセポは、ふねにのりこんで、
ともづなをほどきました。これから
ヘルシンキの市場^{いちば}に行くのです。

ポツポツポツポツというモーター
の音^{おと}がひびく中^{なか}で、お田^{かあ}さんが大き
な声^{こえ}をはりあげていました。「けさ
の荷^にのたくさんだこと。ジャガイモ
にカバの木^きの葉^は、それにきのうエイ

ラとセポがつんだ「ツルコケモモ。」

「それに、お田^{かあ}さんのあんだ、いろいろなもの^{おお}の大きなつつみ。ひざかけをもう1まい、テーブルクロスをもう1まいって、^{つく}どんどん作ってさ。」

「でも、どうしてもきょうにまにあわせなきやいけなかつたんだよ。きょうこそ^{あたら}おぼくは新しいスキーを^か買うんだからね。」

セポは毎年^{まいとし}2月にはスキーレースにでるのです。セポは夏^{なつ}と秋^{あき}のあいだ中^{じゅう}、となりの家^{いえ}のおひやくしょうさんのお手^てつだいを^{あたら}して新しいスキーを^かかう^{かね}お金を^{ことし}ためました。今年こそ、ゆうしょうしてやるぞと^{おも}思っているのです。

「わたしは、どくりつきねん^び日のろうそくを^かかうんだ。」エイラはいいました。エイラもカバ^かの木の^は葉を^あつめて、お^{かね}金を^かためたのです。12月6日^かはフィンランドのどくりつきねん^び日で、どの家^{いえ}のま^{ひかり}にもろうそくの光^{ひかり}が^ともります。エイラは、よろ^やず屋^みで見^みつけたと^かつてもきれいなろうそく^かを、もう^か買ったつもりでいま

す。

お父^{とう}さんは港^{みなと}の南^{みなみ}の方^{ほう}へかじをとり、いつもふねをつける港^{みなと}のはしつこの方^{ほう}へと、モーターボートを^{うん}てんして^いきました。お父^{とう}さんがボートからとびお^りて、ともづなをつないだ^いときには、^{いちば}市場にはもう何人^{なんにん}かの人^{ひと}が^き来ていて、ろ店^{てん}をは^いっていました。

「セポ、このひざかけのつつみをろ店^{てん}にも^いって^いちようだい。」お田^{かあ}さんが^いいました。

セポはひざかけの^{おお}大きなつつみをかかえたまま、エイラがボートから^で出^でて、港^{みなと}のはしの石^{いし}だん^{あが}を上^あつてくるのを^{つよ}ま^{かせ}ちました、強い風^{かぜ}が^ふいてなみがたつので、ボートは^{ゆる}ゆると^ゆれました。エイラはかた手^あにおさいふ^あを^{にぎ}って^ゆつくりと^あ歩いて^きました。

「早くしろよ、エイラ。ひざかけがお^もい^いんだ。」セポは^いら^いら^して^いいました。

エイラは^{なに}何^{なに}かい^あおうとして、かおを^あげました。その時^{とき}です。ぐらつとして、ボートのはし^かをつかもうと

したとたん、おさいふを水の中にお
としてしまったのです。

「あつ、お金が。」エイラはなき声
でさげびました。お父さんは、ポ
ートからさつとオールをとって、おさ
いふをとろうと水の中をかきまわし
ました。

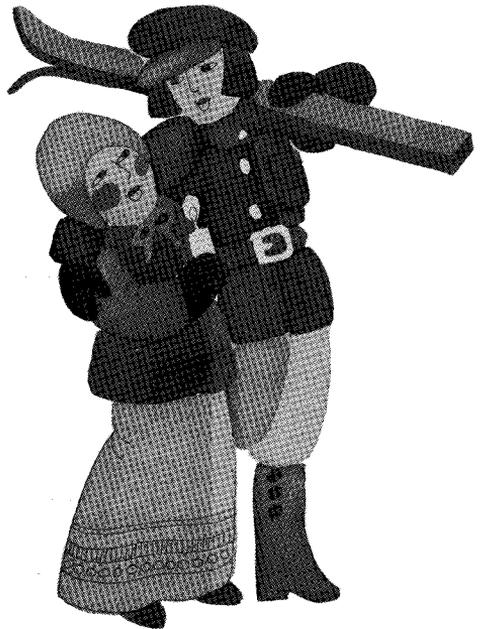
「ごめんよ。しずんじまったよ。」
お父さんはあきらめて、いいました。
お父さんは、やさしくエイラをポ
ートの外に出してくれました。セポと
エイラとお田さんは、むつつりとだ
まりこんでる店の方へ歩いていきま
した。

お田さんは、手早く店先にひざか
げや、テーブルクロスや、マットを
ひろげました。さむい朝でした。と
なりにはサロネンさんのおばさんが
カバの木のかわのカゴの店を出して
いました。

セポは近くのろ店で、あたたかい
ポーシュ（中にジャムの入ったペス
トリー）を買ってきて、お田さんと
サロネンさんのおばさんにあげまし
た。そして、ポーシュをゴクンとの
みこむと、いいました。「さて、ぼく

はスキーを買いにいこう。いっしょ
に来るかい、エイラ。」

エイラは首をよこにふりました。
「サロネンさんのおばさんが、お手
つだいのおだちんをくれてから行く
わ。そしたら、小さなろうそくが買
えるわ。あのすてきなろうそくは、
来年までおあずけね。1年なんて、
すぐよね。」エイラはわらおうとしな
がらいいましたが、セポには、エイ
ラがなきだしそうになっているのが
わかりました。



セポはエイラに、せ中をむけて早足で市場を出ました。おもいコートのえりを立て、毛がわのぼうしをまぶかにかぶって行きかう人にも、自もくれませんでした。でも、やつとのことでためたお金が水の中にしずんでいくのを見ていたエイラのあわれなかおが、自にやきついてはなれませんでした。セポは、「あの時、エイラをせかさなければ……」と思うと、いやな気持ちになりました。

店に入っていくと、店員さんがいました。「ああ、よかったですよ。秋のあいだ中あなたがほめていたスキーがまだありますよ。」

セポは、長いことそのスキーにさわったり、ながめたりしていました。

ポケットに手をつつこんで、おさいふをさがしていると、「1年なんて、すぐよね」といったエイラの声が聞こえたような気がしました。

「ちよつとまつて。」セポは店員さんがスキーをたなからおろそうとするのをとめました。「えーと、えーと。」セポはずつとやすい、ヒッコリ一のスキーをゆびさしていいました。

「それじゃなくて、あれにしてください。」

市場へといそぎながら、セポは考えました。「レースにゆうしようする気なら、いいワックスをつかえばいいんだ。それに、スキーなんかに気をとられないで、れんしゅうだ。」

新しく買ったスキーをお父さんのモーターボートにつみこむと、セポはサロネンさんのろ店へ行きました。かなしそうなかおをして、エイラはまだカゴをつみかさねていました。

「エイラをちよつとつれていってもいいですか。よろず屋にたいせつなようじがあるんです。」セポはおばさんにいいました。

サロネンさんはうなずきました。

「よろず屋に、お兄ちゃん。」エイラはセポにかけよりながらいいました。

「そうだよ、おいで。あのろうそくが売れないうちに行こうよ。」セポはいいました。

もうせかさなくても、エイラは目をかがやかせながらついてきました。

大管長会より
クリスマスの
メッセージ

大いなる
よろこびの
おとずれ

「おそれるな。」それは今から
2,000年ほど前、イエス・キ
リストがお生まれになったそのきよ
い夜に、ベツレヘムの近くの野にい
たひつじがいたちに、神様のみつがい
たちがさいしよにいったことばです。

このクリスマスのきせつにあたり、
わたしたちもみなさんに「おそれる
な」ともうしあげたいと思います。す
くい主がお生まれになってからいま



で、不安やおそれにおののく全地の
人々にとって、このことばほど大きな
見みのあることばはないでしょう。

少年少女のみなさんも、むずかし
い問題にあり、時にはおそれおのの
くことがあることでしょう。そのよ
うな時にはいつも、キリストがお生
まれになったきよい夜に神様のみつ
かいがいった次のことばを思いだ
してください。「見よ、すべての民に与
えられる大きな喜びを、あなたがた
に伝える。きょうダビデの町に、あ
なたがたのために救い主がお生まれ
になった。このかたこそ主なるキリス
トである。」(ルカ2：10—11)

みつかいがひつじがいたちに「お
それるな」といったように、神様は
予言者ジョセフ・スミスをとおして、
わたしたちみんなに「汝ら大いに元
氣を出して怖るることなかれ、そは
主なるわれ汝らと共に在りて汝らを
護ればなり……」(教義と聖約68：
6)とおっしゃっています。

みなさんがどこにいても、何をし
ていても、「汝らと共に在りて」とや
くそくされたとあり、神様のみたま

がみなさんとともにいてくださるこ
と、そしてみなさんをあいてくだ
さることをあかしたします。いつ
も自分がほんとうに神様の子供であ
るということを、そして、だれであ
ろうと、どこにすんでいようと、い
つでも神様が自分のことを考えてい
てくださるということを心にとめて、
神様を愛し、となり人を愛してくだ
さい。

家をひどいあらしにおそわれた少
年がいました。その日は一日中、ラ
ジオはあらしの放送ばかりでした。
夕方になって、その少年はお母さん
とおそろしい放送を聞きました。心
はだんだんに不安になってきました。
と、とつぜん、何かがこわれる大き
な音がして、少年は力がぬけてしま
いました。ラジオからは何も聞こえ
なくなり、家はくらやみの中にとり
のこされました。そのとき、お母さ
んの耳には、おすこがこらえきれず
にすすりなく声が聞こえてきました。

「こわがるんじゃないのよ。でき
るだけのことはしてあるんだから。
それに、お母さんもいつしよにいる

でしょ。わたしたちにできることは、もう何も無いわ。」お田さんはいいました。

「そうだね。もうぼくたちにできることは何も無いね。でも、家のことはみんなしたけど、ぼくたちの心のためにもう少し何かできるのじゃないかしら。」

そこで、お田さんとこの少年はいっしょにくらやみの中にひざまずいて、勇気となぐさめと安らぎをあたえてくださるようにといのりました。すると、あらしはやみませんでした。が、ふたりはやすらかなきもちになって、きゆうじよたいが来るまで、安心してまつことができました。

キリスト誕生の絵では、いつもキリストが中心となり、まん中におかれていますね。キリストを中心として生活するならば、どんなときにも心が平安になります。たとえかなしいことがあったとしても、おそれを、なぐさめをもたらす信仰にかえることはできます。神様を信じ、そのいましめをまもろうといつもどりよくすることによって、もっと神様を

みぢかにかんじ、勇気やなくさめや平安をうつことができます。

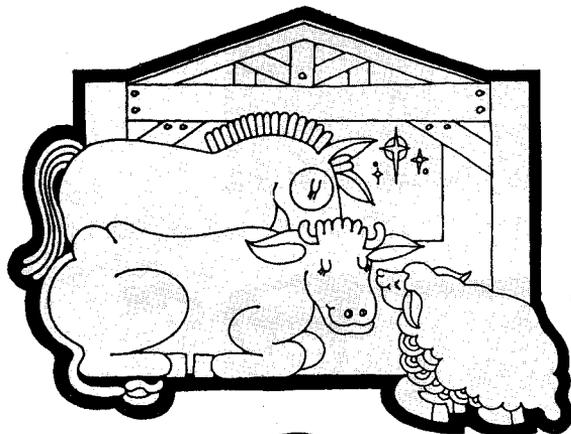
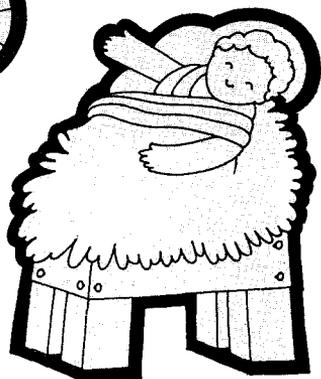
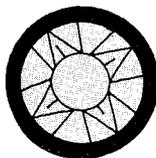
今年のクリスマスに、プレゼントをあげたりもらったりするときには、天のお父様がとくべつなおくりものをしてくださったことを思い出しましょう。天のお父様のとくべつなおくりもの、それは天のお父様の愛する御子、ベツレヘムにお生まれになったイエス様です。そうすれば、クリスマスの休日、ほんとうにきよい日になります。

この楽しいクリスマスのきせつに、使徒パウロのことばを思い出してほしいと思います。「神がわたしたちに下さったのは、臆する霊ではなく、力と愛と慎みとの霊なのである。」

(Ⅱテモテ1：7)

このクリスマスのきせつに、みなさんがおそれをしりぞけ、天のお父様や御子イエス・キリストの愛を知ることができるよう、そして今もこれからもずっと、わたしたち大管教会がみなさんを愛し、しゆくふくしつづけていることを知っていただけるように、お祈りしています。

すくいぬしの たんじょう

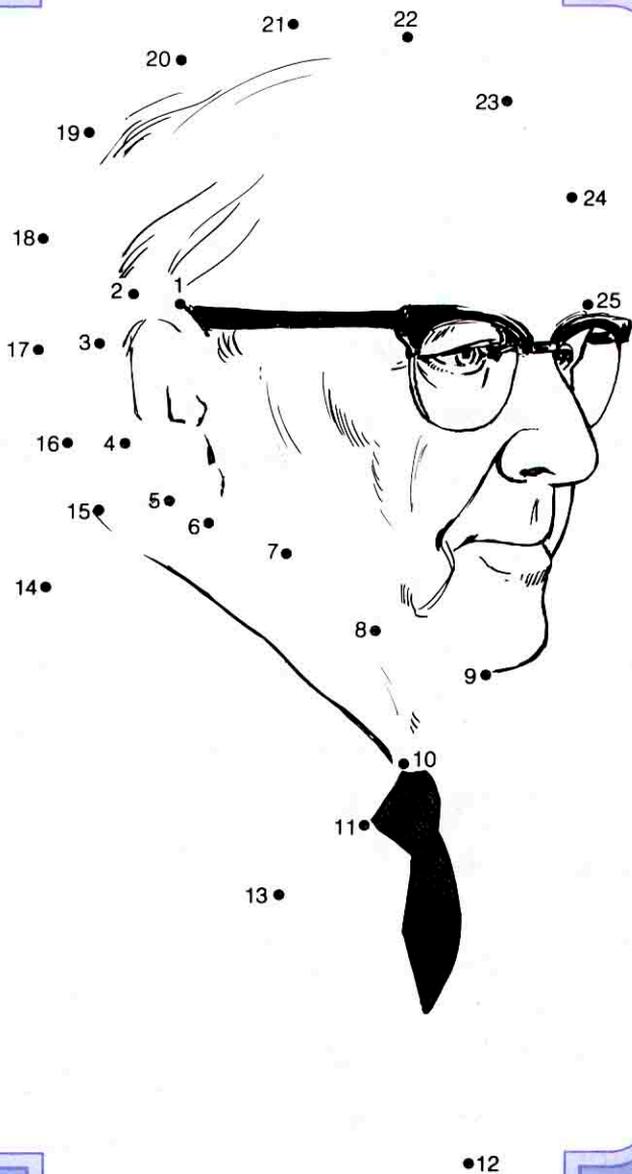


このえを大きなかみにかいて、色をぬり、かていのゆうべのげきにつかえるようにしましょう。小さなこどもたちは、色をぬったり、きりぬいたり、かみにはってキリストたんじょうのえをつくったりして、あそんでもいいですね。



ダブルユー

スペンサー・W・キンボール



生涯を通じて一生けんめいはたらく人、わたしたちの予言者
スペンサー・W・キンボールは、一
緒にはたらく人々がおどろくような
速さで、神さまの仕事をしています。
その上こまかいことに気を配り、数
えきれないほど親切な行ないや思い
やりのある行ないをして、まわりの
すべての人々をはげまし、祝福して
います。

エドワード・L・キンボールとア
ンドリュー・E・キンボール・ジュ
ニアの書いた「スペンサー・W・キ
ンボール」という本の中から、アリ
ゾナ州サッチャーにすんでいたころ
のキンボール大管長の少年時代のこ
とを少しお話ししましょう。

キンボール大管長の子供のころの
思い出の中で一番大切なものは、教
会のことや福音のことです。お母さ
んは日よう学校や聖さん会のときい
つも（とスペンサーは記憶している
のですが）、子供たちといつしよにサ
ッチャーの集会所の4番目のれつ
のいすにすわりました。家族は、食事
の前にはいつも自分のいすのせをテ

ーブルの方にむけて、ひざまずきま
した。いつも、子供たちはお母さん
のひざでお祈りしました。そして、
いつも断食をし、いつも什分の一を
おさめました。

スペンサーが5さいの夏に、お父
さんがスペンサーとアリス（スペン
サーの妹）にジャガイモ畑を少しく
れました。ジャガイモができると、
スペンサーはくま手でほりおこし、
アリスはこれをあらってきれいにし
ました。そして、スペンサーはきれ
いなつなぎのふく、アリスはドレス
を着て、ジャガイモをスペンサーの
赤い手おし車につみこみ、売りに行
きました。ジャガイモがみんな売れ
てしまうと、スペンサーとアリスは、
はしゃぎながら家へかえってきまし
た。ふたりがお金を数えているのを
聞いて、お父さんはいいました。「す
ごいじゃないか。さあ、そのお金を
どうしようか。」すると、子供たちは
答えました。「アイスクリームと、ア
メと、クリスマスのプレゼントを貰
うんだい。」お父さんは、やさしくい
いました。「神様はズーッとわたした

ちに親切にしてくださいな。わたしはなえをうえたり、たがやしたり、かひ入れをしたりはしたよ。だが、地面は神様のものだ。それに、神様は雨をふらせたり、赤日様をてらさせたりもしてくださる。だから、わたしはいつも、とれたものの10分の1を神様にかえすんだよ。それは神様のものなのだから。」

キンポール大宮長は、こう語っています。「父は、強制はしませんでした。ただ、確信をもつてせつめいしてくれたので、わたしは自分のいちをおさめることを大切に思い、その特権を感じるようになりました。」

コートントジル(アプサ一の兄)はほし車をあつめると、それを車にほうり上げます。すると、アプサ一は車の上でそれをふみかたためるので。ふたりのお兄さんは、車を2台ならべて、大きなフォークでアプサ一にしがとをかたづけてしまいたがりました。ひたひたでアプサ一に立っているアプサ一目かけて、ほし車をなげ、アプサ一がたおれたところへもこひとひがほし車をほころ

なげるのです。ほし車の中からアプサ一がはいだしてきて、かんかんにおこりながら、大きくなつたらおかしをしてやるそとわめきちらすかえしを、と、ふたりは、わらいこげたものてした。

ときどき、アプサ一はちよとてしたおかしをししました。あるあつひ月よう日の午後のことです。畑のむこうから初等協会のほしまりのかねが聞こえたので、アプサ一はいりました。「初等協会に行かなくらや。」その時のことをアプサ一はすくとあとになつて、こう話しています。「兄たちはいしました。「だめだよ。初等協会に行つちや。」わたしはいました。「お父さんがいたら、初等協会に行かせてくれるよ。」すると兄たちはいしました。「お父さんはいなくない。だから、きょうは初等協会の会をやめよう。」コートントはアプサ一に、アプサ一はさきい年上でした。……上、アプサ一はさきい年上でした。……ふたりはほし車をなげつちや、車に山つみにしました。そして、いきました。「どうだい、アプサ一にいたる気分は。」おえはありませんでした。そ

の時には、わたしはもう集会所の方へ半分ほどの道のりを行ってしまっていたのです。」

子供のころになくなったお田さんを思い出して、キンボール大管長はこう語っています。「学校からかえると、ぼうしをドアのそばのかけ金にかけ、さらあらいをすませると、『お田さん、お田さん、お田さん』とよんだものです。すると田が出て来て何の用かとたずねるのです。わたしはただ、『何でもない』と答えました。何でもないので、ただ田が家にいるかどうか知りたかったのです。」

やがてお田さんはなくなりましたが、スパンサーは心の中にいつもお田さんのことを考えていました。お父さんもそのことを気にかけていました。お田さんがなくなって9年後、お父さんが「高価なる真珠」をプレゼントしてくれました。中には1915年1月25日、アンドリユー・キンボール、オリーブ・ウーリー・キンボールよりスパンサー・ウーリー・キンボールへ」と書いてありました。その本の中に、スパンサーは大すき



なお田さんの写真をはりました。

スパンサーは、こう書いています。「田は欠点のない人でした。きよらかで、……完全さの見本のような人でした。田に欠けている徳をひとつでも指摘できる人がいるでしょうか。光が田の明るい赤い髪にさして後光のように見えると、田は聖女様のようでした。」お田さんが世を去ったとき、スパンサーはまだほんの子供でした。スパンサーは、11さいの時をかぎりに会えなくなった田のおもかげを、むねにいだいて成長したのでした。

東京南ステーク部大会

—新ステーク部長会組織される—



10 月17日、七十人第一定員会会員のウィリアム・R・ブラッドフォード長老の管理の下に東京南ステーク部大会が開かれ、新しいステーク部長会が組織された。

ステーク部長／前田 修(写真中央)
 第一副ステーク部長／津田政廣(写真左)
 第二副ステーク部長／酒田達雄(写真右)
 幹部書記／福永 隆
 書記／鬼本昌樹

第1回東京地区文化祭開かれる

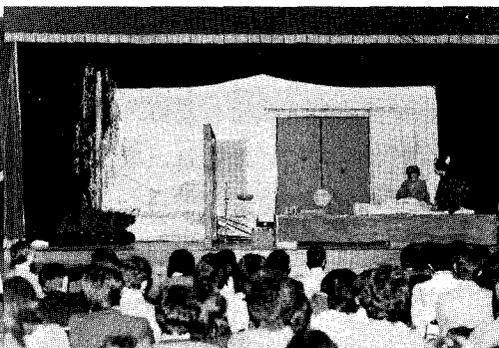
—日本のモルモンの文化を育てよう—

10 月9、11日に東京地区で初めての文化祭が、東京ステーク部センターで開かれました。地区の文化の向上という目的で、独身成人委員会が中心となって実施されました。初めての試みで多くの試みや問題があったにもかかわらず、プログラムに参加して下さった兄弟姉妹たちは多くの犠牲を払って準備をし、素晴らしい発表をして下さいました。コンサート、演劇祭、展示物、ダンスコンテストとプログラムが進むにつれて、250人ほどの兄弟姉妹が集まり、熱気あふれる雰囲気の中で無事フィナーレを迎えることができました。

日本にはアメリカのような立派な文化活動のための組織や設備、歴史はまだありませんが、才能あふれる兄弟姉妹がたくさん



▲ダンスコンテストでジルバに合わせて踊る独身成人。(東京ステーク部センターで)



▲町田ステーク部の劇団「八変化」による山本周五郎原作「糸車」の発表

います。その才能を高度に育み発表する機会が必要であるという認識から、このプログラムは始まりました。

スポンサー・W・キンボール大管長は次のように語っています。「モルモニズムはまだ書物にも、絵画にも、彫刻にも、講演にも、完全には表現されていない。……このような価値ある主題に生命と感情と正しい理解を与えることができるのは、忠実で霊的で活潑な教会員しかいない。偉大な芸術家の手になり、一流の批評家に認められたこれらの作品は、すべての映画館で長期興

行となり、地球上のあらゆる国語の民に触れることだろう。」(『福音と芸術』『聖徒の道』1978年4月号, p. 5)

日本においても、芸術に秀でた兄弟姉妹を輩出し、モルモンの文化を通じて伝道できるような日は、私たちが日本を愛し、それを望むことによって遠からず来ることでしょう。その土台を地道に築いていくためにも、さらにより多くの兄弟姉妹の理解を得てよりよいものにしていきたいと思えます。(レポーター：久保雅子、東京地区文化祭実行委員)

第4回名古屋ステーキ部 大運動会

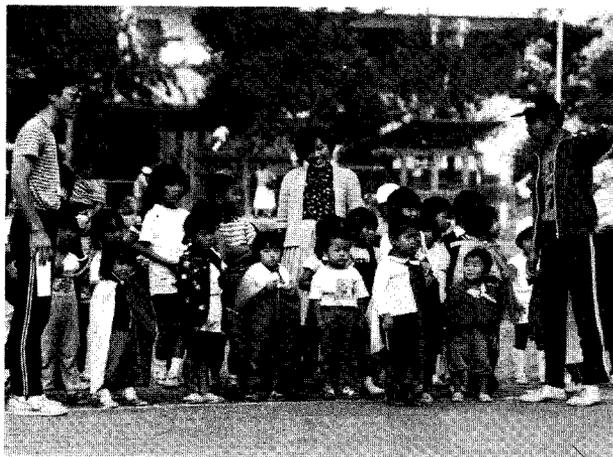
—三河地方と尾張地方の対抗戦—



体

育の日の振り替え休日である10月11日がお天気になって一番喜んだのは、名古屋ステーキ部の会員たちでした。恒例の第4回ステーキ部大運動会は気持ちよい

青空の下で300人以上の参加を得て盛大に楽しく開かれました。今回は徳川家康にゆかりの深い岡崎市体育館グラウンドで、岡崎ワード部を始めとする三河地方のワード部・



◀運動会にプライマリーからも参加支部の会員たちが中心となって運営され、プライマリーの子供から年配者までが楽しく一日を過ごしました。

三河地方と尾張地方の対抗戦は、シオンのステーキ部建設を目指している三河地方の必死の追い上げをからくもかわした尾張地方が勝利を収めました。(レポーター：富田康夫、名古屋ステーキ部実行副委員長)

多数の一般参加者を得た 「親子キャンプ」350人が参加

—大阪ステーキ部「親と子の絆を強くする会」主催—

我が大阪ステーキ部には中野ステーキ部長を会長とする「親と子の絆を強くする会」という組織があります。この会は教会外の人々に対して「親子の絆を強めましょう」と呼びかける目的で約2年前に作られました。その趣旨から、活動は一般の人々を対象に計画され、この夏には新聞広告で一般の家族を募集し、大和郡山市立少年自然の家で2泊3日の親子キャンプを行ないました。

キャンプは大和郡山市教育委員会の協力をいただいで堺ステーキ部と合同で行なわれ、一般から40家族、教会員40家族、そして独



▲シンボルマーク

身成人と宣教師のボランティア50人の総勢350人という大所帯となりました。その頃近畿を大型の台風が襲撃し、ハイキングコースなどはズスズと前日に大幅な計画変更を余儀なくされましたが、当日は祝福され大快晴となり、大学教授を招いての教育の講義や親子でのハイキング、クラフト作りとたくさんのプログラムに皆汗だくとなりました。ボランティアの兄弟姉妹たちは初日慣れない仕事に右往左往していましたが、最終日、担当家族の子供たちに手作りのペ



「神のみわざが、彼の上に」 ——視力を失って30年の歩み——

横浜ステークス横浜第1ワード部

武蔵野 博

早 いものでバプテスマを受けてから34年、光を失ってから30年になります。振り返って見ると、私の信仰生活には、盲人であるがゆえに多くの困難な問題がありました。

毎週教会に行きたいと思っても、自分の力だけではどうにもなりません。新・旧約聖書以外に点字書のない状況での福音の学習をどのようにしたらよいのか。与えられた召しをどのように遂行したらよいのか。神権者としての特権に伴う義務をどのように果たしたらよいのか。私は死にもの狂いで杖にすがり、バスと電車を乗り継いで約1時間の教会への道を何度も往復しました。福音の勉強も、人が1時間でできることを数時間かけ、人が1年で成し遂げるところを数年かけて行ってきました。家族や教会の兄弟姉妹たちが助けてくれましたが、大変に困難な苦しいことに出会った時には、「昇栄に盲道なし」と自分自身に言い聞かせながら、この道に励んできました。

私は教会に入ってから何時も心に懸かるひとつのことがありました。それは「なぜ私のような特別な才能や能力を持ち合わせていない者が、多くの日本人たちに先駆けて、戦後伝道が再開されて間もなくの時期に福音を聞く機会が与えられたのだらう

か。」私はそれには何か理由があるように思えました。最近になってそれは「私のような者にでも、この福音に従った生活ができるということ、多くの人々に知らせることにより、信仰を失いかけている兄弟姉妹や、信仰生活に困難を感じている兄弟姉妹たちに、慰めや励ましを与えるためにそうされたのではないか」と思うようになりました。このように考えることは私自身の励みにもなります。

弟子たちの質問に答えてイエスは、生まれながらの盲人であるのは、「本人が罪を犯したのではなく、また、その両親が犯したのではない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである」(ヨハネ9:1-3)と言われました。神様は私の目を見えるようにしようと思えば、今すぐにでもそれができるお方です。それをなさらないのは、このままの方が私にとってより良いとの御意だと思います。私自身このように考えるようになってから、盲人であることがそれ程つらくなくなってきました。

私は日曜学校の教師の責任を受けてから、すでに20年が経過しております。レッスンの準備として、月曜日から水曜日位までの早朝にテキストを読んでもらいます。それを録音しながら聞き、木曜日または遅くとも

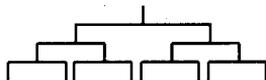
金曜日までに点字に書き写します。私は中途失明者なので、点字が早く読めません。ですからレッスン中に点字を読むことは難しいので、書き写したノートを読み、テープを聞きながら、その内容を覚え込みます。私は仕事である鍼治療の合間にこれらのことをします。この外に神権会で毎週良いレッスンを学びますので、朝早くテキストを妻に読んでもらいます。

また家庭菜園をやっていますので、今のシーズン(夏)では、週に2、3回、朝4時頃に起きて車で15分程の畑に行き、畑仕事を終えて6時から6時半までに家に帰ります。家庭の夕べは、毎週月曜日に家族で語り合い、水曜日の夜は、神殿に参入します。この外に私に割り当てられているホームティーチングもしています。

私はこれらのことをすべて行なっています、その内容は、どれひとつをとっても十分だとは思っていません。しかし私は、信仰とは、神様がその時代に召された予言者の勧告に従って生活することだと思っています。ですからまず予言者の言われたことを、「始める」。始めたらそれを「継続する」。次にそれを継続しながら「よりよいものにして行く」。これが信仰であると思っています。

これまでに何度か挫折感を味わってきましたが「求め続けなさい。そうすれば与えられるであろう」というイエスのみ言葉に励まされて、これからも絶えず努力を続けます。この福音は、確かに私を幸福へと導く道ですから……。(むさしの・ひろし 1929年生まれ、日曜学校教師。鍼灸師)

死者の贖いのために



半年間に「家族の記録」
2,000枚を提出

東京ステーキ部
東京第7ワード部
小宮房子

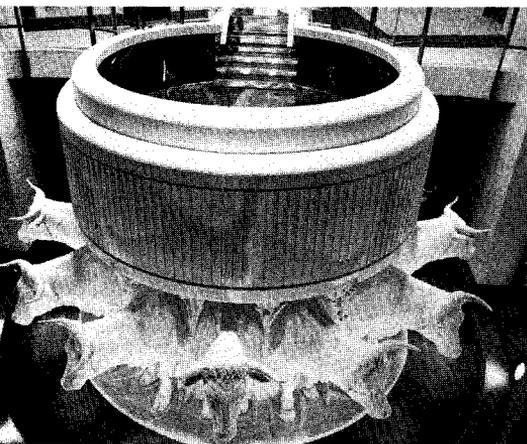


今年(今)の3月1日、私は近所にあるお寺の広々とした部屋で、600年前から記録された自分の先祖の過去帳6冊を手にし、感

動していました。

これが私の系図探求の始まりです。それから毎日、そのお寺を訪門し、過去帳の中から必要と思われる情報を一生懸命書き写しました。ところが2,000名位まで進んだ時に、ある方から、戒名だけがわかっても、その死者たちが互いにどのような血縁関係にあったか証明できなければ、死者のための儀式を行なうことはできないと教えられました。この時は本当にがっかりしました。

しかし、今年の目標は系図だけと決心していましたので、血縁関係を立証するのに必要な傍系の除籍謄本をとるため、市役所に行きました。そうしますと、傍系の人を除籍謄本については、その人たちの直系の子孫の承諾が必要であることを教えられました。そして、この承諾を得るために、4月、5月と親戚の人々を訪問してまわりましたが、行く先々で「どうぞ調べて下さい」と快い返事をいただいた時のうれしさは、今



▲東京神殿バプテスマフロント

でも心に残っています。昔話を聞いたり、古い写真を見せてもらったり、おいしい食事をいただいたり、たくさんの楽しい思い出ができました。

2カ月の間に家族の記録用紙を200枚提出しましたが、その間は体力の消耗がひどく、気力だけで記録の作成を続けました。毎週一度参入していた神殿の中で、必要な情報が得られるように助けて欲しいと、何度祈ったかしれません。そして、提出枚数はさらにふえ続け、やがて600枚を越えるまでになりました。同じように、神殿で疲れた体を癒して下さるようと祈ったこともあります。その時も不思議なくらいに体調が良くなったことを覚えています。以前はひと月に一度、ホームティーチャーから祝福の儀式を受けていましたが、今は自分で祈るだけにしています。このような経験を通して、私は自分のしていることが主のみこころにかなったことであり、主が見守っておられるという確信をさらに深くす

ることができました。

沖縄のある姉妹から「資料がなくて、調べたくても調べられない人がたくさんいます。沖縄と比べたら、こちらの人はとっても恵まれています。もっともっと神殿や系図の責任をよく果たせるのではないですか」と言われたことがあります。私はこの言葉を聞いて、大いに発奮するところがありました。

半年の間に計2,000枚の家族の記録を提出することができましたが、私はこれによって、死者たちが長い間儀式を待ちわびていた気持ちを理解し、いつの日か喜びの内に、彼らとまみえることのできる日がくるという確信を強くしました。そして、主が生きたもうこと、小さな力ながらも私たちの働きが死者の救いに欠かせないものであることをよく知ることができました。(こみや・ふさこ 東京第7ワード部系図相談員)

*系図部神殿サービスセンターに問い合わせしてみたところ、2,000枚の「家族の記録」の提出枚数は日本一とのことである。これで約4,000人の身代わりの儀式を行なうことができる。

「どうしてお父さん
お祈りしないの？」

盛岡地方部八戸支部
竹内久巳子

皆 さんの中にも、会員でない夫を持たれて、悩み苦しんでいらっしゃる方がおられると思います。私も昨年までそうでした。

定時制高校時代の行事で、今の主人に会

うことができました。親、兄弟に会っても
らうより先に教会へ行行って、兄弟、姉妹に
会って欲しいと思いました。交際している
時、彼は私に教会はやめられないのかと聞
きました。私は、主から受けた愛と祝福を
知っていましたから、そのようなことは決
してあり得ないと話しました。もし、これ
でだめなら、それでもよいと思いました。
彼は大変悩んで、両親・兄弟・先輩に相談
したそうです。最終的には自分で結論を出
し、宗教と結婚するのではなく彼女と結婚
するのだからと申し込んでくれました。

私は、結婚するなら同じ末日聖徒の人と
思っていました。彼には末日聖徒的な所
が感じられましたし、私が教会へ行くこと
を承知してくれましたので、結婚に踏み切
りました。

結婚して1年半後、子供のそばにいる方
が大切と思ひ私は看護婦の仕事をやめました。
以前より頻繁に教会へ集えるようになりまし
たが、サタンはいろいろな方法で教会へ
行けなくするように邪魔をし、すきをねらって
容赦なく私の心の中に入り込んで来ました。
月一度のホームティーチャーの訪問や扶助
協会の姉妹たちのフェローシップによって、
どんなに励まされたでしょう。子供も成長
するにつれお祈りを覚え、食事の時、寝る
前とお祈りができるようになりました。あ
る晩、お祈りして食事をしようとした時、
長男が「どうして、お父さんお祈りしない
の?」と言うのです。一瞬ドキッとしました。
主人と私の間に気まずい雰囲気漂ったか
らです。そのことがあってから、主人はこれ
ではいけないと思うようになったようです。

仕事のために1年に半年いるかないかの
主人でしたが、一昨年の暮れから、また

一緒に教会へ行ってくれるようになりました。
昨年一月には、小泉家で主人のために
「家庭の夕べ」を開いて下さいました。2
月に主人自身証を得て、レッスンを受ける
ようになり、神様のことをもっと知りたい、
神様の近くにいたいと思うようになりました。
そして、私の願いよりはるかに早く昨年
の4月10日にバプテスマを受けました。

私は本当に信じられませんでした。まだ
まだ先のこととっていました。大きな祝
福を得たと感激しました。主人と私は、今
までの罪を涙ながらに悔い改めました。そ
して、神に断ち切られないように努力しよ
うと約束しました。今まで信仰を捨てずに
頑張ってきてよかった、天のお父さまは、
私を見て下さったと、父なる神の大き
な愛に感謝致しました。また、これまで長
い間神殿に入ることを夢見ていました。家
族揃って結び固めを受けたいと願ひ続け
てきました。念願かなってその夢も今年7月
に実現致しました。

神様は確かに生きて、細いささやきの声
で私たちを導いて下さっています。そのこ
とを心から証します。(たけうち・くみこ
1953年生まれ、現在扶助協会第一副会長)

▼竹内御家族（八戸支部の教会で）



私の回心と新生

高校の番長から末日聖徒に



札幌ステーキ部札幌第2ワード部
山崎 健一 (18歳)

昭 和56年2月のある寒い日、駅を出た私は背後から「バスケットをしていますか」とふたりの変な外人に声をかけられた。振り向くと自分より背の低い外人たち(私の身長は185センチ)が、ほほえんで立っていた。それがマトウィグ長老とアドセン長老であった。

彼らとの出会いは、私の人生に奇跡をもたらした。本当に不思議なことだが、社会に背を向け、とんでもない無法をしていた私が、彼らからイエス・キリストの福音を聞くことになったのだ。そしてとうとう、同年の3月18日にバプテスマを受けて、この教会の会員になったのである。

バプテスマを受ける前の自分は、酒とタバコを平気で飲み、ケンカを趣味としていた。毎日毎日、朝から晩までケンカばかりし、しかも負けたことがなかった。こう言

えばおわかりいただけると思うが、私は私の通学する高校の番長であり、いわゆる今のマジな子とはおよそ反対の所で生きており、そのために世間からは白い目で疎んじられ、親からも、持て余されていたような人間だった。私は、だれからもほめられることがない人生の落伍者として、私自身の青春の鬱屈を、ただ酒やタバコで紛らわし、暴力の世界でだけ自分の存在をひけらかしていたのである。

だから、福音に接した時も、自分のようなものが神のようになれるだろうか、半信半疑であった。福音は真実だと思ったが、私は素直に、イエス・キリストに付いて行こうとは思わなかった。しかし宣教師の熱意と愛と自分の祈りを通して、私は本当に悔い改めてバプテスマを受けることができたのである。

3月末の安息日に、私はステーキ部長に呼び止められた。その時の私は頭には白い包帯をターバンのように巻き、手にもグルグルと包帯をしていた。その上、顔はお岩さんのように無気味にはれ上がっていたのである。

「ちょっと階段から落ちて転んじゃって」とごまかしたが、実はこんなことがあった。福音を聞いた私は、バプテスマを受ける前につながりを持った仲間や、やっつけた連中から、もちろん離れようとした。しかし、そんな私に彼らがケンカを売ってきたのである。私は前の奴らをこうやって痛めつけて、左右の奴らをこうしたら後ろに向いて……と、憎悪に駆り立てられ、血を騒がせた。ところが、その時、「だれかがあな

たの右の頬ほを打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい」(マタイ5:39)という言葉が、頭の中に浮かんできた。そして、今またケンカをやったら、自分は神様から見放されるような人間になってしまうと考えた。こうして私は、鉄パイプ2本、木刀3本でメタメタにやられて気を失った。長い時間倒れたままだったが、気がついてあたりを見回すと、鉄パイプは曲がっており、木刀も2本折れていた。手と足の骨が1本ずつ、あばら骨が一本折れており、頭もやられたために、1カ月程目がかすんで見えない程だった。悔しかった。本当に悔しかった。初めて負けた。今思っても悔しい気持ちがある。でも、私は一度も手出しをしなかった。ステーキ部長は、「番長はやめなくてもいい。福音の番長になりなさい」と言われたが、私はよくその意味がわからなかった。

それから間もなくステーキ部大会があった。十二使徒のジェームズ・E・ファウスト長老が来られた。ファウスト長老は、会員はみな宣教師であることを強調された。その言葉は、自分にとって、とても大きな意味があった。そして自分が大きく変わっていった。

私は私のかつての友達に福音を教え始めた。街頭でも宣教師と一緒に伝道するようになっていった。今までに5人の人が改宗した。現在も引き続きこうした伝道活動をしている。

ところであのケンカの敗北はなんだったのだろうか。最近になって、ようやくわかりかけてきたように思う。あの時に勝って

いたら、現在のような楽しいモルモンとしての生活はないはずだ。今はこうして、神聖なメルケゼデク神権の長老の職を頂き、何ひとつ恐れることもないような平安がある。神様が守って下さり、いつも愛して下さっていることを心の底から知っている。イエス・キリストが贖い主であり、この教会が真の神様の教会であることを知って、本当に幸福である。

そうすると、あの敗北は自分にとっては素晴らしい勝利だったのだ。自分は気がついた。力が愛に勝つことはなく、愛こそが、もっとも強い力なのだ。この世のすべてが愛であるということを知った。私は多くの人々に愛されたい。それゆえにその何倍も愛したいと思う。

もうすぐ私は伝道に出る。その時は、私の目に映るすべての人々に福音を伝え、地球をひとつの教会にするようなつもりで頑張りたいと思う。(やまざき・けんいち)

☆編集室から☆

●ローカルページの来年度2月号掲載分締切は、12月17日(TDC必着)です。各地の行事、催し物などのレポートは時機を失することなく、早目にお送り下さい。せっかくレポートして下さった記事も、締切日を過ぎて到着するために掲載できないケースがよくあります。

●『読者のひろば』には「聖徒の道」を読んでの感想を掲載しています。特に興味深かったお話、記事の感想文をお寄せ下さい。連絡先(電話番号)を記入して下さい。宛先:〒158 東京都世田谷区上用賀4-9-19/TDC「聖徒の道」編集室。

●今月号の『職業と信仰シリーズ』と『読者のひろば』はお休み致します。

相良健一元名古屋 伝道部長、東京地区 代表に召される



の7月に名古屋伝道部長としての3年間の任務から帰還した相良健一長老が、10月、東京地区代表として召された。担当ユニットは、東京、東京南、東京西、横浜、町田、静岡ステーキ部である。これまで東京地区代表の任にあった鈴木正三長老は、東京地区から分割独立した東京北地区（東京北、東京東、高崎ステーキ部）を担当する。

相良長老は昭和12年東京に生まれ、疎開から後就職までの期間を山形で過ごした。バプテスマは今から25年前の8月25日、山形市内を流れる馬見ヶ崎川で受けた。上京後は松竹大船撮影所に就職、現在は自然食品の販売代理店を営んでいる。教会では数数の要職を歴任してきたが、日本で初めてのステーキ部が東京に組織された時は、副ステーキ部長として召された。

奥様の相良真由美姉妹は名古屋の生まれ。昭和36年2月14日に横浜支部でバプテスマを受けた。教会では扶助協会、初等協会などの役職を歴任し、現在横浜ステーキ部初等協会会長の職にある。相良長老との結婚は昭和39年10月31日、当時横浜支部が建築中だったため、仮の集会所として使用していたガールスカウト会館で式が行われた。

おふたりの間には3人のお子さん（二男一女）がいるが、相良長老の楽しみは、お子さんと一緒に本を読んだり時代劇を見たりすることだそうである。



▲クモラの丘霊園を奉獻するために集った人々。左より小松長老、ブラッドフォード長老、司会をする鈴木長老。

クモラの丘霊園 奉獻される

9月19日（日）、クモラの丘霊園（所在地・埼玉県入間郡毛呂山町長瀬1313）で、七十人第一定員会会員のウイリアム・R・ブラッドフォード長老の管理の下に、奉獻の集いがもたれた。

教会墓地奉献の祈り



七十人第一定会員
ウイリアム・R・ブラッドフォード

永 遠の父なる神様、イエス・キリストのみ名と聖なる神権の権能により、私たちは頭を垂れ、ここ日本の地における王国の会員で幕の彼方へ去った人々の肉体を埋葬する場所として、私に付与された権威の下にこの墓地を奉献致します。

聖なる神権の権能により、私はこの地が守護され、自然の力から守られ、破壊行為から守られ、その他あらゆる危害から守られるように、天からの力を呼び求めます。またこの地を訪れるすべての生ける人々が、みたまを感じ、みたまに満たされるように、天からのみたまの力を呼び求めます。さらにこの地にみたまがあつて、この世を去った人々が後の世にあつても教会の使命を完うするべく続けて働くことができるように願ひ求めます。

この地を奉献するにあたり、私はこの地に埋葬されるであろう方々の家族に対して、特別な祝福を残します。すなわち、愛する人々をこの墓地に埋葬する時、あなた様の

みたまがその家族の心と霊とを貫き通し、神殿の儀式を忠実にこなす望みが彼らの中に湧き上がるように願ひ求めます。また、愛する人々が幕の彼方へ過ごしていることを知ることにより、彼らのための業を神殿で行ないたいという願ひが、その家族にもたらされますように。さらに家族の人々の心に糸図探求への願ひが湧き起り、幕の彼方の親族にまで絆を広めることができますように。

私はこの墓地の運営に携わる管理委員会の全委員に祝福を残します。管理上生じる諸問題に対して、それを理解する力が得られますように。またこの地の近隣に居住される方々、またこの霊園の他の墓所を管理される方々の上に祝福があつて、私共との間に愛と協力の関係が確立され、互いの行なう事柄に敬意を表することができますように。

私はこの地域のステーキ部とワード部の指導者全員に祝福があり、彼らがこの神聖な場所に対して特別な敬意を払うことができるように願ひ求めます。そして彼らが十分な維持管理を行ない、美しく整えることによってこの墓地が麗しき所となり、訪れるすべての人々が靈感と祝福を受けることができますように。

私はこれらの祝福をこの墓地の上に結び固め、この地の保護と保存に、またこの地に埋葬されるであろう人々の保護のために必要な、さらにこの地を管理する生ける方々にとって必要とされる他のあらゆる祝福が天より降り注がれるように願ひ求めます。これらのことを、私に付与されている聖なる神権とイエス・キリストのみ名により行ないます。アーメン。

▼整然と墓石が並べられたクモラの丘霊園



聖徒の道

索引

1982年 1月～12月
第26巻 第1号～第12号

☆愛

- ヘイスティー……………1月 25
愛が義務感に取って代わる時……………3月 10
「私はヒュース兄弟です。
あなたのホームティーチャーです。」…3月 21
「ふれあい」(デビッド・B・ヘイト)……………4月 92
「愛はいつまでも絶えることがない」(ヒンクレイ)……………4月 160
一通の手紙……………6月 20
友達のために……………6月 31
神の愛は罪の壁を越えて(ロナルド・E・ポールマン)……………7月 48
チョコレートケーキ……………10月 10
クリスマスカード……………12月 12

☆イエス・キリスト

- キリスト・イエス……………3月 12
「ああ、聖なる贖い主」(ニール・A・マックスウェル)……………4月 11
「主はよみがえりぬ」(トーマス・S・モンソン)……………4月 26
イエスの復活(マリオン・G・ロムニー)……………7月 8
イエスの証をなすに雄たくあれ(ベンソン)……………7月 108
「救い主、イエス」(デビッド・B・ヘイト)……………7月 127
キリストに倣いて(マーク・E・ピーターセン)……………7月 172

☆祈り

- 常に祈りなさい(キンボール)……………3月 1
憎しみを乗り越えて……………5月 5
祈りの証……………6月 23
家族の祈り(ジョン・H・グローバーク)……………7月 92

☆癒しの儀式

- キンボール大管長、癒しの儀式について語る……………8月 40
神権の祝福を与える……………11月 14

☆家庭・結婚

- 実りある結婚生活を築く……………2月 14
ホームティーチャーの祝福……………3月 23
家庭を平安を得る場とするために(スミス)……………4月 139
栄えある女性の務め(エズラ・タフト・ベンソン)……………4月 177
あなたの妻を愛しなさい(ファウスト)……………5月 8
幸福な両親、幸福な子供……………5月 11
質問ゲーム……………6月 21
人類の希望である永遠の結婚(シンブソン)……………7月 36
愛は家族を癒す力(F・エンツィオ・ブッシュェ)……………7月 120

- 「その子らは立ち上がって彼女を祝し」(スミス)……………7月 140
家庭にあって福音を学ぶ(キンボール)……………8月 1
主が父親たちに求められること(バックマン)……………8月 8
愛が鍵でした……………9月 28

☆教会での責任

- 教会で最も重要な責任……………2月 7
愛が義務感に取って代わる時……………3月 10
妻の教会の責任を助ける……………9月 11

☆教師：学習

- 心促す福音の教え……………1月 14
学習は万人の務め……………1月 18
絶えず学ぶことの特権(シャーリー・W・トーマス)……………4月 170
義なる教師のために(ジーン・R・クック)……………7月 44
家庭にあって福音を学ぶ(キンボール)……………8月 1

☆苦難

- 苦難の時のために……………1月 7
いとし子ジョニー……………2月 30
憎しみを乗り越えて……………5月 5
マルタ……………5月 16
アルコール中毒……………5月 32
喜びを求めて(イレイン・A・キャンノン)……………7月 164
心……………8月 28
ローラの後見人……………9月 24
タビ・エスカ……………10月 25
「あなたはこの人たちが愛する以上に、
わたしを愛するか」……………11月 20

☆質疑応答

- 幼児のバプテスマ……………2月 4
目には目、歯には歯……………3月 9
古代イスラエルの宗教……………6月 7
女性への侮り……………8月 20
家庭生活と教会の召しの両立……………8月 23
旧約時代のイスラエルが直面した誘惑……………10月 19
人々の間にある富や才能の隔たり……………11月 5
福音書とイエスの生涯……………12月 21
山上の垂訓の説教形式……………12月 22

☆什分の一・財政管理

- 「わたしから離れては、あなたがたは何一つできない」……………2月 9
天の窓……………2月 11
什分の一——主の律法……………2月 13
「私を試みなさい」……………3月 36
不変の原則(N・エルドン・タナー)……………3月 46
什分の一の律法に従う(ゴードン・B・ヒンクレイ)……………7月 73
什分の一に関して思う4つの事柄……………10月 22
什分の一とオーバーコート……………12月 5

☆正直・誠実

- 「何ら善恵にあらず」(マービン・J・アシュトン)……………7月 14
われらは、正直なるべきことを信ず(ピーターセン)……………7月 24

神殿と神殿事業 (ヒンクレー).....	11月 1
クリスマスに捧げる祈り (大管長会).....	12月 1
断食の律法 (ロムニー).....	12月 2
☆伝道・改宗談	
帰らなくてもいいのですね.....	1月 36
キンボール大管長、伝道について語る.....	2月 47
伝道活動を通して清くなる (ブラッドフォード).....	4月 82
「わたしの羊はわたしの声に聞き従う」(菊地良彦).....	4月 113
妙な調べ.....	5月 39
口を開きて.....	6月 14
福音が教えるもの (リグラント・リチャーズ).....	7月 51
網をおろして.....	8月 14
友人に福音を伝える: グループによる家庭集會.....	9月 16
批判から改宗へ.....	9月 30
失敗したら赦してくれ!.....	9月 31
下期せぬ収穫.....	9月 34
冬のバプテスマ.....	11月 9
最後の転任.....	11月 30
ベネズエラ以外なら.....	11月 34
「あなたが立ち直ったときには」.....	12月 38
召しを受ける前に.....	12月 41
ポップ・ガンサー.....	12月 52

☆話し方 (お話の責任)

心に残った6つの話.....	2月 22
----------------	-------

☆福 祉

「愛は限りなく」(J・リチャード・クラーク).....	4月132
人に仕えることによって得られる喜び.....	4月144
奉仕によって証を強める.....	4月147
「高潔な心で受けられるように知恵を使って 与えなさい」(マービン・J・アシュトン).....	4月150
福祉の原則に添った生活をする (ロムニー).....	4月156
仕事の価値 (J・リチャード・クラーク).....	7月135
1980年代の雇用に関するチャレンジ(ファイアンズ).....	7月146
福音——職業の基盤となるもの (バックナー).....	7月150
歴史的見地から見た労働と福祉 (ロムニー).....	7月156

☆扶助協会

「愛はいつまでも絶えることがない」(ヒンクレー).....	4月160
転機の時扶助協会 (バーバラ・B・スミス).....	4月164
絶えず学ぶことの特権(シャーリー・W・トーマス).....	4月170
扶助協会と福祉 (マリアン・R・ボイヤー).....	4月173
栄えある女性の務め (エズラ・タフト・ベンソン).....	4月177
女性の神権に対する正しい眼.....	6月 24
同じ心を持つ人々 (バーバラ・B・スミス).....	7月168

☆子供のページ

空中都市.....	1月 38
カウボーイアリ.....	1月 40
小さなお友だちへ (G・ホーマー・ドラム).....	1月 43
ひいおじいちゃんの長ぐつ.....	2月 54
しゃくとり虫.....	2月 58

ながい、かくれているかな?.....	2月 61
ポールマン長老のお話(ロナルド・E・ポールマン).....	3月 38
おもちゃばこ——めいろう.....	3月 41
ざいさん.....	3月 42
小子のすの荷車.....	5月 22
どうぶつえん (ぬり絵).....	5月 26
ヒーバー・J・グラント.....	5月 28
天のお父さまの時間(チャールズ・A・ディディエ).....	6月 51
おもちゃばこ——さあ さがそう.....	6月 54
ソマリヤの草原で.....	6月 55
かわつてゐるっていいな.....	8月 49
デビッド・O・マッケイ.....	8月 52
小さなお友だちへ (ジェームズ・E・パラモア).....	8月 54
ミツオシエのわけまえ.....	8月 56
ナヒードのひみつ.....	9月 38
ジョセフ・フィールディング・スミス.....	9月 42
すくいぬしをみじかに (L・トム・ペリー).....	9月 44
おもちゃばこ——ことばの説明.....	9月 48
どこにかくれているかな.....	9月 49
マリアとサフランの花.....	10月 38
クロスワード・パズル.....	10月 42
イエス様は みなさんを とても愛しておられます (デレク・A・カスバート).....	10月 43
ジョージ・アルバート・スミス.....	10月 48
小さなお友だちへ (アンゲル・アブレア).....	11月 39
ハロルド・B・リー.....	11月 43
イソギンチャクのまわりで.....	11月 46
エイラのろうそく.....	12月 54
大いなるよろこびのおとずれ.....	12月 58
すくいぬしのたんじょう.....	12月 61
スベンサー・W・キンボール.....	12月 62

☆ローカルページ

1982年に向けて、さらに大いなるビジョンを(菊地良彦).....	1月 46
伝道部長の「わが目標」.....	1月 47
ステーク部長からの年賀状「新年度のわが目標」.....	1月 48
全国LDS音楽祭.....	2月 62
全国LDSろうあ者大会.....	2月 62
全国弁論大会 (人生は素晴らしい旅・池間晴美、 一人一人に手紙を書く・武田修).....	2月 63
クリスマスの夕べ (日本札幌伝道部).....	3月 52
群馬LDS聖歌隊クリスマスコンサート.....	3月 53
「グッピー・サンタクロース」.....	3月 54
4人の地区代表の82年度目標.....	3月 57
レーガン大統領、ボランティア活動を推奨する.....	4月184
歩みを速めたキンボール大管長の8年間.....	4月185
クモラの丘霊園納入式.....	4月186
クモラの丘霊園の開園にあたって.....	4月186
'81年度中に召された110名の日本人宣教師出身別合計.....	4月187
開校2年目を迎える東京インスティテュート.....	4月188
救援物資、ポーランドへ向けて.....	5月 44
前扶助協会会長、スバッフオード姉妹逝去.....	5月 44
新たにふたつのステーク部誕生 (大塚界ステーク部、東京西ステーク部).....	5月 45

深淵聖徒イエスキリスト教会

浦和ワ

弘前城燈籠祭りに「キリスト像」……………5月46
 「若い女性」現場からのレポート
 (土田準子, 相良なおみ, 太田徳子)……………5月48
 慶びの詩(徳田愛子)……………5月53
 新たに4つの神殿……………6月60
 ボーランド語とヘブライ語のモルモン経, 出版される……………6月60
 専任宣教師(独身の長老)の伝道期間が18カ月に短縮……………6月61
 モルモン・タバナル合唱団, ヨーロッパ演奏旅行へ……………6月61
 発展する教会(世界各地の会員数・ステキ部数)……………6月62
 日本の伝道81年の伸展と教会員の増加……………6月63
 5人の新伝道部長の紹介……………6月64
 見よ王の軍! JMTcからの報告……………6月67
 信仰生活70年の実り——長尾栄姉妹(89歳)……………6月68
 集会場および用地の取得, 建築,

管理維持に関する方針……………7月178

仙台ステキ部大会・福岡ステキ部大会……………7月180
 L・トム・ペリー長老夫妻来日……………7月180
 第二回学生祭開かれる——徳田虎雄氏を招いて……………7月181
 L D S 学生協会結成される……………7月182
 名古屋ステキ部ユースカンファレンス……………7月182
 「若い女性指導者養成キャンプ」(名古屋西ステキ部)……………7月183
 広島フラーフェスティバル L D S 祭……………7月184
 ヴェラ兄弟, 来日のヴァイオリニスト……………7月185
 インタビュー・菊地良彦長老に聞く……………8月59
 ウィリアム・R・ブラッドフォード長老の略歴……………8月61
 菊地長老との出会い(井上龍一, 鹿山スサナ)……………8月62
 大阪北ステキ部センターの紹介……………8月65
 お茶の水支部, オープンハウス聞く……………8月66
 川に幼児が……………8月68
 新聞からの話題・海外に見る地方の時代……………8月72
 管理監督会地域管理本部組織図……………8月73
 なごりを惜しむ菊地長老献送会……………9月50
 日の光栄の喜びを多くの人々に(菊地良彦)……………9月51
 姓氏大講演会……………9月53
 本からの話題・世界記録会議に参加して……………9月54
 3人の伝道部長の献送迎会(福岡ステキ部)……………9月57
 第1回コーラスコンテスト(沖繩ステキ部)……………9月59
 推せんのことば・聖典からの物語(謝花良康)……………9月62
 千葉ワンド教会堂完成(岩永昌治)……………9月64
 アドニー・Y・小松長老, 東京神殿長に……………9月65
 長崎大水害・長崎支部からの報告……………10月50
 日本ジャンボリー開催される……………10月51
 第8回日本ジャンボリー(天野昭・山本和寛)……………10月52
 ファミリーキャンプ(名古屋ステキ部)……………10月54
 サマーフェスティバル(高松ステキ部)……………10月54
 サマーキャンプ(町田ステキ部)……………10月56
 若い女性キャンプ(東京ステキ部・東京西ステキ部)……………10月56
 学生協会リーダーズ・セミナー……………10月58
 学生協会に思う(牧善一郎)……………10月58
 セミナリ・インスティテュート特別大会開かれる……………10月64
 東京神殿の神殿長会新たに組織される……………10月65
 アドニー・Y・小松長老の略歴……………10月65
 特集・伝道部長の任を終えて
 こけしと伝道(坂井圭)……………10月50

主の懲しめを耐え忍ぶ(堀田徹)……………11月51
 私の発見(岡本亮)……………11月53
 備えと決断(相良健一)……………11月54
 名古屋ステキ部神殿参入ツアー……………11月63
 神殿に参入して(林谷みゆき)……………11月63
 パーバ・B・スミス姉妹,
 ジャーリー・W・トーマス姉妹来日する……………11月64
 東京南ステキ部大会……………12月66
 第1回東京地区文化祭開かれる……………12月66
 第4回名古屋ステキ部大運動会……………12月67
 相良健一元名古屋伝道部長, 東京地区代表に……………12月76
 クモラの丘霊園奉献される……………12月76
 教会墓地奉献の折り(ブラッドフォード)……………12月77

☆私の証

情緒障害児と共に(安田塚三)……………3月55
 私の転機となった日〔宣教師との出会いから(中塚祐丈), 仙台ステキ部独身成人大会で(山本公也), 走行不能のバイクから(永野卓司)〕……………4月189
 ボクは暴走族だった(吉兼法雄)……………5月48
 人生の荒野から(佐々木優子)……………6月72
 手話に込める熱き思い(小泉道子)……………7月186
 改宗して得られた心の平安(照井睦子)……………7月187
 原爆の炎をくぐり抜けて(中村良子)……………8月67
 知恵の言葉とPTA活動(塚田淑子)……………9月58
 一冊の本から(正木恵子)……………9月60
 川崎病にかかった娘(増井重治)……………10月59
 神殿宣教師として奉仕して(塩隆義)……………11月56
 78歳のバプテスマ(田部ムツ)……………11月59
 「神のみわざが, 彼の上に」(武蔵野 博)……………12月70
 死者の贖いのために(小宮房子)……………12月71
 「どうしてお父さんお祈りしないの?」(竹内久巳子)……………12月72
 私の回心と新生(山崎健一)……………12月74

☆職業と信仰シリーズ①~③

刑事である私の使命(高桑治誠)……………4月191
 新聞からの話題(高良慎清)……………5月52
 酒か契約破棄か(上野道男)……………6月69
 助産婦である私にできること(得井扶美子)……………7月190
 土に生きる(河田利夫)……………7月191
 末日聖徒には, 悪い噂や黒い背景がない(鮫島邦彦)……………8月64
 医者が治療し, 神が治す(渡辺和彦)……………9月56
 「人の値は神の前に大いなることを憶えよ」
 (柏勇一郎)……………10月60
 「汝らわが言うところを行わば……」(加藤喜司)……………11月58

☆読者のひろば

5月50, 6月70, 7月188, 8月70, 10月62, 11月60

☆TDCだより・新刊紹介

4月192, 6月73, 7月192, 9月63, 10月63, 12月75

※「聖徒の道」1977年~1981年の5年分を収めた索引をTDCで販売中です。定価200円。

